

風知草

宮本百合子

青空文庫

一

大きな実験用テーブルの上には、大小無数の試験管、ガラス棒のつっこまれたままのビーカア。フラスコ。大さの順に並んだふたつきのガラス容器などがのせられている。何という名か、そして何に使われるものかわからないガラスのくねった長いパイプが上の棚から下っている。透明なかげを投げあっているガラスどもの上に、十月下旬の午後の光線がさしていた。武蔵野の雑木林のなかに建てられている研究所は自然の深い静寂にかこまれていて、実験室の中には微かにガスの燃える音がしていた。一隅の凹んだ

ところで、何かの薬物が煮られているのであった。

ドアに近い実験用テーブルの端に、小さい電気コンロがのつていた。その上に、金網のきればしが置かれ、薄く切ったさつまいもが載せられている。まわりに、茶のみ茶碗、鮭カンの半分以上からになったの、手製のパンなどが、ひろげられている。

静かな、すみとおった空気の中に、いもの焼ける匂いが微かに漂いはじめた。

「そろそろやけて来たらしいね」

「……もうすこうしね」

「そっちの、こげやしないか」

「そうかしら」

実験用テーブルの端へもたれのある布張椅子をひきよせて、いものやけるのをのぞいているのは、重吉であつた。親しい友達がもつて来てくれた柄の大きすぎるホームスパンの古服を着て、ひろ子が彼の故郷からリュックに入れて背負つて来た靴をはいて、いものやけるのを見ている。無期懲役で網走にやられていた重吉は、十二年ぶりで、十月十日に解放された。いが栗に刈られた重吉の髪は、まだ殆どのびていない。

ひろ子は、元禄袖の羽織に、茶ちやつむぎ紬むぎのもんぺをはいて、実験用の丸椅子にかけ、コンロの世話をやいていた。

「さあ、もうこれはよくつてよ」

「——あまいねえ。ひろ子もたべて御覧」

「網走においもはあつたこと？」

「あつちは、じゃがいもだ。農園刑務所だからね、囚人たちでつくっているんだ」

「あなたなんか和裁工でも、じゃがいもぐらいは、たつぷりあがれたの？」

「東京よりはよかつたさ。——巢鴨のおしまい頃はひどかつたなあ……これっぽっちの飯なんだから。二くち三くちで、もう終りさ」

重吉は網走で、独居囚の労役として、和裁工であつた。囚人たちが使つてぼろになつたチョッキ、足袋^{たび}、作業用手套^{てぶくろ}を糸と針とで修繕する仕事であつた。朝の食事が終ると、夕飯が配られる

迄、その間に僅かの休みが与えられるだけで、やかましい課程がきめられていた。日曜大祭日は、その労役が免除された。そういう日に、重吉たちは、限られた本をよむことが出来た。そのかわりに、その日は食事の量が減らされた。本のよめる日は必ず空腹でなければならなかった。労役免除の日は食餌を減らして、囚人たちが休日をしたのしみすぎないようにする。それが、監獄法による善導の方法と考えられているのである。

焼きたいもをとって、ひろ子もたべた。

「あら、本当に、このおいしいものは、特別おいしいわ」

「そうだろう？」

おそい朝飯をすましてすぐ家を出かけ、この研究所に勤めてい

る友達に、重吉の健康診断をしてもらいに来た。重吉とひろ子は、鮭のカンヅメとパンとをもつて来た。友人の吉岡がおいもをあてがつておいて、室を出て行つた。妻子を疎開させたから、研究所に寝泊りして自炊している吉岡は、自分が実験用の生きものになつてゐるよう、隣室のベッドの下に泥だらけのものだの大根だのを押しこんで暮しているのであつた。

「吉岡君、なかなかおそいね」

「送別会なんでしょう？——三十分や一時間かかるわ」

白い上っぱりをはおつた助手がドアをノックして入つて来た。

片隅で煮えている液体の状態を調べてから出て行つた。その薬液は、きまつた時間において、慎重に観察されながら煮られなければ

ばならないものらしかった。

礼儀正しく助手のひとが入って来て、自分の任務を果して出てゆくとき、ひろ子は、そのつど、ぼんやりしたはにかみを感じた。実験用テーブルの端におとなしくかたまつて、たのしそうに、言葉すくなくいもの薄ぎれをやいている自分たち二人。それは、十月の明るい光線にガラスどもが光っている実験室の薬品くさい内部の光景として何でもないその一部分であるような、さりとして助手のひとが毎日見なれているあたりまえの情景であるとも云えなさそうな、はにかみを感じるのであった。

いもがやけてから、ひろ子は、片隅の水道から水をくんで来て、やかんを電気コンロにかけた。一室に、生活にも必要なすべてが

そろっている化学実験室のつくりは、ひろ子の興味をそそった。

ひろ子は実験用テーブルをぐるりとまわって、仔細に千差万別の形をし、はり紙をつけられ、一見無雑作に、しかも極めて意味のある秩序をもって整理されている瓶びんや試験管の林立を眺めた。

重吉は、そうやって大テーブルのまわりを珍しそうにまわっているひろ子につれて、視線をうつした。そして、ひろ子がひとまわりして、もとの円い木椅子に戻って来たとき、重吉は、

「二人でいると、ちつとも退屈じゃないねえ」

そう云った。

ひろ子は、重吉の顔を見た。重吉の眼は柔かく、睫毛まつげに美しいかげりがある。ひろ子は、思わずまだ立ったままでいた自分の位

置で借り着の重吉の大きい肩に手をおいた。重吉が感じたままを云った素朴な表現は、今二人でこうしていると何とはなしのたのしさにつれ、彼の十二年の獄中生活はどんなに単調な、変化のない時間の連続であつたかということをも、まざまざとひろ子に告げたのであつた。

「でも不思議ねえ、わたしたち一人で暮していなけりやならなかつたとき、退屈だとは思つてなかつたでしょう」

「そりやそうだ」

「わたしなんか寂しいということさえよくわからなかつたぐらいだつたわ」

ひろ子の眼の裡を深く眺めて、やがて重吉が何か云おうとした

とき、

「やあ、どうも大変失礼しました」

眉根の太い、小柄な吉岡が戻って来た。

「ここで養成された看護婦さんの巣立ちだもんだから、どうも手間どって」

実験用テーブルの上の、つつましいピクニックのあとを見まわした。

「いもはどうでした。案外うまかったですよ？」

「あまくて珍しかったですよ」

「そりやよかった、あれは我々の農園産ですよ、職員がみんなで作ったんです」

戦争が進んで、研究所員の生活不安がつつて来たとき、研究を継続するためにも吉岡たちが先頭にたつて、広大な敷地のなかに農園をはじめたのであった。

「——よかったら拝見しましょうか」

「ええ」

重吉は椅子から立ち上った。そして、すぐその場で背広の上着をぬいでしまった。

「診察はあつちなんじゃないのかしら——」

「ええ。レントゲンがあつちだから……」

「別の部屋へいらつしやるのよ。——どうなさる?」

ひろ子は重吉を見あげた。

「わたしも行きましようか」

「いいよ、いいよ」

気まりわるいような表情で、重吉はことわった。

「大丈夫さ、来なくたって……」

重吉のことわる気分は、ひろ子につたわった。重吉は、自分の病気について、九年の間、只の一度も信頼出来る診断というものをうけることが出来なかった。刑務所の医者は、思想犯の患者を診るときには、その前にきまって附添の看守に向つて念を押した。「どうだ、これは転向しているかね」と。だから重吉は、自分の努力で病勢を納めて来ているものの、本当には拘置所で患うようわずらになった結核がどの程度のものなのか、正確に知らないも同然で

あった。もし余りよくなかったとき、いきなりその場でひろ子までを切なくさせたくない。ひとりでにその不安から重吉はことわるのだろう。

「じゃ、ここで待っているわ、どうぞごゆっくり」

小柄な吉岡が、白い診察着の裾をひらひらさせ、スリッパをならして長い廊下を出て行つた。早でまわしに上着をぬいでいた重吉が、いくらか靴を曳き気味に、大きい、ゆっくりした歩調でそのわきに行く。

ひろ子は、研究所の長廊下を段々遠ざかってゆく重吉の後をドアの前に佇んで永いこと見送っていた。

重吉の、あの歩きつき。一步一步とゆっくり大きく、いくらか

体を左右にゆする歩きつき。肩がゆすれるのは重吉だけの癖であった。けれども、ああいう足の運びかた、それはすべての独居囚がもっている歩きつきと云えた。日ごろ、足元の軽いひろ子でさえ、編笠をかぶり、編笠の内側に出ている編めのジャカ、ジャカ、に髪の毛を気持わるくひきつられながら、女看守につきそわれて歩いたときは、やつぱりああいう工合に、のろく、重く、一步一步と歩いた。編笠が視線を遮って、うるさく陰気だからばかりではない。彼等がそういう歩きつきになるのは出来るだけ長く監房の外に出ている時間をもちたいという、我知らぬ渴望からであった。きまった通路を、きまった場所へ、きまった目的のために、きまった時間内にしか歩かせられない。一本の通路の、どっち側

を歩くかということさえ歩く人間の気まかせにはさせられない歩
行の間、特に独房にいるものは、自分の一歩、一歩を体じゅうで
味い、歩くという珍しい大きい変化を神経の隅々にまで感受しよ
うとする。本人たちが自覚しているよりも深いその欲望から、彼
等はみんな外の世界にない独特ののろく重い足どりになって来る
のであった。

あの歩きつきで、細かい紺紺あわせの袴あわせの着物と羽織とをきて、帽子
のないが栗頭に、前年の冬はいていたひろ子の手縫いの草色足
袋をはき、外食券食堂で買った飯を新聞紙にぶちまけたのをたべ
たべ、重吉は一人で網走から東京まで帰って来た。同じ東北本線
を、重吉は四カ月前、北海道弁の二人の看守の間にはさまれ、手

錠をかけられ、青い作業服、地下足袋に、自分のトランクを背負って北へ向って行つた。空腹で、看守がくれる煎大豆をたべて、水をのんだための下痢に苦しみながら手錠ははずされずに行つた。十月十四日、十二年ぶりに東京の街をひとりで歩くことになった重吉は、一面の焼原で迷い、ひろ子が住んでいる弟の家のぐるりを二時間も迷つてやつと玄関に辿りついた。その朝、重吉は上野へついて真直に、昔、自分とひろ子とがはじめて一緒に暮した小さな二階家が あつた町の方角へと歩いた。二階家は上野から来て坂の上にある国民学校の建物が目じるしであつた。出迎えに会えなかつたその朝、自分のうちへ、ひろ子のいるところへ帰るといふ重吉の感情の中心に、くつきり浮んだのが小さい昔の家の入口

の情景であつたということを、ひろ子は感動なしに聴けなかつた。たつた二カ月足らずを二人で暮したその家から、十二年の間に一人でひろ子に移つた家は、幾軒あつたろう。移るたびに、ひろ子は細かく周囲の風景も描き、間どりを話し、スケッチの絵ハガキさえ重吉に送つた。それらをみんな重吉はよく知つてゐる筈であつた。勿論、今、ひろ子が住んでいる弟の家も。町名、番地、隣組番号さえ重吉は知つてゐる。その家に両親が暮してゐたとき、重吉も来たことさえある。だが、焼野原となつた東京で、かえつて来た重吉の心に、めじるしとして感じられたのは、昔の二階家であつた。その家は、ひろ子の弟の家の北側が垣根一重のところまで焼けたとき、焼けて跡かた無くなつてゐた。

自由になって、まだ十日余りしかたない重吉のとりなし万端に、ひろ子のこころを動かしてやまないものがあつた。

十四日の朝、二人がやっと口をきけるようになったとき、重吉はひろ子に、

「どうだろう」

と相談した。

「みんなに一応挨拶した方がいいだろう？」

その一つの家に、焼け出された知人の一家をはじめ三家族が暮らしていた。その知人と、裏の美術家が、十三日の夜十二時頃まで上野駅の出口の改札に立って、もしか重吉が来るかと待っていたひろ子の道づれをしてくれたりした。

「それは、その方がいいわ」

「紹介しておくれ」

玄関わきの客室に、知人一家は暮している。ひろ子は、そこへ行つて、

「昨晚はありがとうございます」

と云つた。

「あんなにしてわざわざ来て頂いたりしたときには来なくて、わたしは待ちくたびれて腰ぬけになったら、かえつて。——石田です」

うしろに立っていた重吉を紹介した。重吉は、まだ歸つて来た時のままのなりで、嵩^{かさ}だかにその畳へ手をついて挨拶をした。

「石田です。——どうも永い留守の間はいろいろお世話様になりました」

それは決して、ただ時間の上で永い留守をしていたという挨拶ではなかった。二度と還ることはなかったかもしれない者、生活の外におかれていたものが、今帰った、良人として妻のところへ、社会生活のごたごたの中へ戻つて来た、その挨拶であつた。戦争の中から、妻のところへ生きてかえることの出来た男たちも、何人か、こういう挨拶のしかたをしたことだろう。わきに膝をついて重吉の挨拶を見ていたひろ子は、のどにせきあげて来て、やつときこえるような声で、

「じゃ、また、のちほど、ね」

重吉を立たせた。二つの手を独房の畳の上へは決してつかなかった重吉。そのために、例外のようにひどい判決をうけた重吉。

その重吉が、急に世間並のしきたりの中に戻って来て、それをこんなに素直にうけとり、世話になるより、世話になられているという関係の知人にまで真心をもって、不器用に挨拶している。人の一生のうちにさらにある瞬間として感じてすぎることはひろ子にとって是不可能であった。

今、吉岡が、じゃあ拝見しましょうか、と云ったとき、重吉はいきなり背広の上着をぬいってしまった。それも、重吉がただ熱心に診て貰おうと思っていたからのこと。それだけに重吉のいくらかとんちんかなその動作のこころを解釈するこころもちがしな

かった。

吉岡純介は、重吉というよりは寧ろひろ子の親友の一人であつた。結核専門で、そのためにひろ子は何度も重吉の体について相談して来た。一九四二年の夏、東京は六十八年ぶりとかの酷暑であつた。前年の十二月九日、真珠湾攻撃の翌朝、そういう戦争に協力することを欲していない者と見られていた数百人の人々の一人として、ひろ子も捕えられ、珍しい暑い夏を、巣鴨の拘置所で暮した。皮膚の弱いひろ子は、全く通風のない、びっしり汗にぬれた肌も浴衣もかわくということのない監房の生活で、毛穴一つ一つに、こまかい赤い汗もが出来た。医者は、その汗もに菌みがき粉をつけておくと、云つた。しまいに掌、足のうら、唇のま

わりだけのこして、全身がゆで小豆の中におっこちた人形のようなになった。そして、監房の中で昏倒し、昏睡状態こんとうで家へ運ばれた。

二日ほどして意識が恢復しはじめた。最初の短い覚醒の瞬間、ひろ子は奇体な、うれしいものを見た。それは、自分に向って心から笑っている吉岡の顔であつた。吉岡が、特徴的に太い眉根をうごかして、浅黒い顔に白い歯を見せて笑いかけている。その顔が、丁度アヒルの卵ぐらいの大きさに見えた。そんなに小さく、そんなに遠いところにあるのに、それは吉岡にまがうかたなく、実に鮮明に、美しく見えた。ひろ子は、うれしさに声をたてて笑つた。拘置所の中で段々足もとがふらつき、耳が苦しく遠くなつて

来たとき、ひろ子はどんなに、ここに吉岡さえ来てくれたら、と思つたろう。その吉岡の顔が見えた。ほんとうにうれしい。——だが——再びくらくなる意識のうす明りの中で、ひろ子は全力をつくして考えた。——これは夢だ。どうせ夢にきまつている。うれしがったりしてはいけない。吉岡さんなんかいる筈はないんだもの……。

そこからどの位時間が経つたのか、二度目にまた吉岡の顔が見えた。そのときは、もうあたりまえの大きさになっていた。そして、「どうです、吉岡ですよ。わかりますか」

そういう声もきこえた。眼の水晶体が熱と血液の毒素のためにむくんで、ひどく凸レンズになつていたために、そんなに吉岡の

顔も小さく見えたのであった。

ひろ子は、死んだ自分が又生きられたことを、吉岡の骨折りときりはなして考えることが出来なかった。重吉はそのいきさつを知っていた。重吉の病気を吉岡に診せたがっているひろ子の気持も度々つたえられていた。

十月十四日に帰って来たとき、重吉は決して健康人の顔色でなかった。それでも、昼飯をたべると、すぐ迎えに来ていた友人たちと遠い郊外へ出かけた。そこでは、もう活動が準備されていた。夕方おそくなつて、そして、又道を間違えてひどく迷って疲れて帰って来た重吉に、ひろ子は、

「健康診断しましょうよ、ね。健康診断をちゃんとしなければ絶

対に駄目よ」

心痛に眉をよせて力説した。

「吉岡さんに診て貰いましょう。それからなくちや、わたしたち、どう暮したらいいのか分らないみたいで……わかるでしょう？」

「そうしよう」

それにつけても思いおこすという風で重吉は、

「——木暮の奴……」

と云った。木暮は、一九四四年頃どこかの刑務所から転任して巢鴨へ来た監獄医であつた。病監での日常事で意見が衝突した重吉について、精神異状者という書類を裁判所へ出した。

「わたしはね、こんどこそ、本当にあなたを生かしたいと思って診てくれる人に診せたいの、いいでしょう？」

十二年の間、重吉は彼を積極的に生かそうとする意志が一つもない環境の中で、しょうこうねつ猩紅熱から腸結核、チフスと患って、死と抵抗して来た。今度は、どうだろう、と、重吉の無言の格闘を遠まきに見まもられている裡で、死なずに生きて出て来た。吉岡に診ましようと言われて、いきなり上着をぬいだ重吉が、ひろ子には^{ひしひし}犇々とわかった。重吉はかえって来てから、自分が感じている善戦し責任を果たした満足と歓喜とを、彼におとらない程度まで実感し、慶賀にみたされているいくつかの心があることを日ごとに発見しつつある。それは妻であるひろ子ばかりのことではなか

った。歴史の野蛮な留金はずされて、くりひろげられた世代の欲求のうちに、重吉の感じる共感が響いているのであった。あるときに、ひろ子を殆ど涙ぐませるのは、その共感に応える重吉の態度の諄^{じゆん}朴^{ぼく}さと、普通にならない世馴れなさであった。重吉の挙止には、ひそめられている限りない歓喜と初々しさと、万事につき、見当のつかないところがまじりあっていた。それらすべては青年から壮年へと送られた重吉の獄中の十二年が、彼の人間らしい瑞々^{みずみず}しきにとつて、どんなに乾いたものであり、胃袋と同じくいつもひもじいものであつたかを知らした。しかも、重吉はそれらについては何とも自分から話さない。十月十日に府中刑務所から解放された重吉の同志たちが、すぐ郊外に集団生活をはじめ

ていた。そこへ重吉につれられて行って、ひろ子は、昔会ったこととのあつた婦人活動家の一人にめぐり会った。そのひとから獄中で死んだ幾人かの人々の話をきいた。宮城刑務所にいた市川正一が、すっかり齒をわるくしたのに治療をうけられず、麦飯を指でこねつぶして食べていた。そうして生きようと努力していた。が、最後には僅か九貫目の体重になつて死んだ。戸坂潤は、栄養失調から全身疥癬かいせんに苦しめられて命をおとした。ひろ子は、これらの話をきいたとき泣いた。重吉と自分とに与えられた愉悅に対して謙遜になつた。これらの人々はどんなに生きたかつたであろうか、と。

ひろ子は、実験用テーブルの前の円椅子から立ち上つた。水道

のところへ行つて、自分たちの使つた茶のみと、そこに漬けてあつた二つ三つの皿小鉢を洗つた。わきの窓から、建物だけ出来てまだ内部設備がされていない別の一棟が眺められた。その棟の空虚な窓々は、秋の午後に寂しく見えた。

——しかし、思えば、感動深く厳肅なこのたびの治安維持法の撤廃と思想犯の解放につれても、故意か偶然か、ひろ子などには判断のつかない混同が行われていた。今度出獄したすべてのものが治安維持法の尊敬すべき犠牲者、英雄のように新聞やラジオで語り、語られているのであつたが、その中に、元来が積極的な戦争強行論者で、その点が当時として反政府的であつたために拘禁されていたというような人物までがまじっていた。その男が多弁

に「民主的」に、権力を非難し野蛮なる法律を攻撃しているのであつた。

話しながら廊下をこちらへ来る吉岡の声がした。重吉が、手さぐりで結んだネクタイを横つちよに曲げた明るい顔でドアをあけた。

「いかが？」

「案外だった」

「そんなによくなつていたの？」

「いい塩梅に病びようそう 竈かまどがどれも小さかつたんですね」

吉岡が煙草に火をつけながら云つた。

「大体みんなかたまっていますよ。この分なら、無理さえしなければ大丈夫と云えますね」

「石田に無理さえしなけりやと、云うのが抑々無理らしいわ。そもそも

——でも、よかったことねえ。ありがとう」

ひろ子は、椅子の背にかかっていた上着をとって重吉にきいた。
「お着にならないの？」

「もう一遍行くんだ——そうでしょう？」

「肺炎のところが、どうもよく見えなかったんです、丁度鎖骨の下だもんだから。ついでに、見直しておいた方がいいでしょう。

血管がそこでいくら太くなっているから、先の方に全然何もな
いって筈はないんですがね」

肺尖のところは、二度目にも骨に遮られてよく映らなかった。

吉岡は、

「石田さんは、自分の体についてちやもう専門家なわけだから大丈夫でしょうが、何しろ、ちゃんと証人が立っているんですからね」

肺尖部の血管のふくれが何を意味し、何を警告しているかを説明した。そして、

「まあ三月に一度は必ずしらべられるんですな」と命じた。

秋の夕暮のかすかな靄^{もや}が立ちのぼりはじめた雑木林の間の小径^{こみち}を、重吉とひろ子とは駅まで歩いた。どっちからともなく手をつなぎあつて、ゆつくりと歩いた。

「お疲れにならない？」

「そうでもないよ」

「来てよかったわねえ」

「見当がついたからね」

乗りものの様子がわからなかったりするからばかりでなく、ひろ子は重吉が帰ってから、出かけるときは大抵一緒に出た。研究所へ来る郊外電車は、時間のせいか思つたよりすいていて重吉は吊革につかまりながら窓外を駛^{はし}りすぎる森や畑の景色を飽きずに

じつと眺めていた。何の拘束もうけず、どこへでも歩き、そうして田舎の景色の間を進み、ひろ子もついてそこに来ている。このあたりまえさが、自分たちにとってあたりまえなことになったという異常なめずらしさ。来る電車の中で、ひろびろとした田野の眺望の間を駛りながら、この感じがつよく重吉の胸に湧いたらしかった。重吉は、あたりにのり合わせている人々の視線を心づかないように並んで立っていたひろ子の肩に手をおいた。そして低い声で、

「あるくのも、一緒にいいねえ」

と云った。ひろ子は、微に上気して重吉を見た。重吉は、あたりの乗客たちを全く見ていなかった。しかし、ひろ子を見ているの

でもなかった。視線は窓の外を駛りすぎる外景に吸いよせられている。重吉の手と重吉の声とは、もしかしたら重吉が心づかないうちに、こうして生活はとりかえされた、という抑えがたい感銘を表現したのかもしれない。

夕闇の林間道があるきながら、重吉は、

「今ごろ、電車、どうだろう」

と云った。

「こみかた？」

「来たとき位ならいいね」

「ひどいと思うわ、時間がよくないんですもの」

その駅にどっさりの乗客が待っているというのではなかったが、

灯をつけて走って来た電車は満員だった。

「どうなさる？」

列に立っている重吉の背中を押すようにしながらひろ子があわてて相談した。

「おいや？ あとだと、一時間待つのよ」

重吉は、黙って一寸 ちゅうちよ 躊躇した。

「のってしまいましたよう、あんまりおそくなるわ」

そう云いながら、ひろ子は自分の体ごと重吉を車内におしこんだ。重吉は、ほかの乗客の足をふむまいとして無理な姿勢で立って、発車するとき、ひどくよろけた。こむ乗物の中で、粗暴な群集にも乗ものそのものにもまだ馴れない重吉が、大きな体をおと

なく小づかれたり、押しつけられたりするのを見るのは辛かった。重吉は、自分が痛感する荒つぽさをひろ子の身にそえて、乗物がこむと、しきりにひろ子をかばった。今もそれで、二人のあがきが却ってわるかった。

「ね、わたしはいいのよ、ここであまく立っているのよ」

池袋で、長い列につながって省線の切符を買い、乗りかえた。

思いがけず、一つ空席があつた。ひろ子は、無理に重吉をかけさせた。

「今は、あなたの方がくたびれやすいのよ」

揉まれた重吉の顔に疲労があらわれている。

「腹がすいて来たね」

重吉は、ひろ子を見上げて苦笑した。

「もう？——でも、おそいこともおそいわね」

「こんどは、夜の弁当ももって来ようよ」

「そうね」

暫くだまっていたが、やがて重吉が、

「ひろ子」

と呼んだ。

「なあに？」

つり革へ手の先だけをのこして、ひろ子は重吉に顔を近づけた。

「『一塊の土』という小説があつたろう？」

「あるわ」

芥川龍之介の作品としては、自然主義風なものとして人々に記憶されている作品であつた。

「覚えているかい」

「あらましは覚えているつもりだけれど……何故？」

宵のこんだ電車の中で、何故『一塊の土』が思い出されたのだろうか。

「あれは、後家の女主人公が、うんと働いて稼ぐけれども、それで自分もはたも不幸になつてゆく話だつたろう？」

「そうだわ」

ちよつと黙つて、重吉は、ごく普通な調子で座席からひろ子を見ながら、

「ひろ子に、なんだか後家のがんばりみたいなのが出来ているんじゃないか」

と云った。

余り思いがけなくて、ひろ子は、眼を見ひらいて重吉を見つめた。

「わたしに？——」

後家のがんばり。……後家のがんばり。……その辛辣さがこたえて、ひろ子の目さきがぼーっと涙でかすんだ。ふるえそうになる声をやっと平らかに、ひろ子は重吉に聞いた。

「あなたに対して、わたしにそういうところがあるとお感じになるの？」

「僕に対してというわけじゃないさ。——一般にね」

「いろんなやりかたで？」

「まあそうだね」

たとえば、きょう自分たちがこうやって研究所へ出かけ、ひろ子とすれば重吉が帰って来ているからこそと思うたつぷりした一日をすごした。その間に、自分はどんな後家のがんばりを示したのだろう。愉しそうにしていた重吉が、何のはずみでそれを感じたのだろう。せわしく朝からのことを思いかえして見ても、ひろ子には重吉にそれを云い出させたきっかけを自分からとらえることは出来なかった。しかも、後家のがんばり、という言葉にふくめられているものは、バカと云われたより、だらしなすと云われ

るよりひろ子にとって苦痛であつた。人生のずれたところへ力ちから瘤こぶを入れて、わきめもふらない女の哀れな憎々しき。それが、この自分にあるのだろうか。帰つて半月もたたない重吉からこんな電車の中で、それを云われなければならないのだろうか。こらえても、涙があふれた。涙をこぼしながら、ひろ子は、大きいリユツクを背負つた男にうしろからぎゅうぎゅう押されていた。

「——どうした？」

つり革にさがっている方の元禄袖で、重吉から半ば顔をかくすようにして黙りこんでしまったひろ子を重吉は見上げた。

「しよげたのかい？」

ひろ子は合点をした。

「しよげることはないさ」

「……あんなに、貞女と烈婦には決してなるまいと思つて暮して来たのに——」

ひろ子は、このとき重吉のとなりにかけている中年男が自分たち二人の言葉のやりとりに関心をもつてきいているのを知った。

同時に、自分が、涙っぽくしかこの話にふれられない今の感情のひよわさを自覚した。それにしても、どうして、よりによつて重吉は、この混雑の中でこんな話をしはじめたのだらう。ひろ子は、氣をとり直し、元禄袖のかげから顔を出して、重吉の耳のそばへ囁ささやいた。

「ここは、あんまり話しいい場所じゃないわ。そうでしょう？」

降りてから。ね……」

「——そうか」

重吉は、ひろ子の気もちや周囲の状況が、はじめてわかったという風に、無邪気におかしそうに笑った。

「でも、どうして急におっしやるの？」

「どうしてってことはないが、考えたからさ——どうせほかにすることがないんだからこんなとき話したい方がいいだろう？」

「大抵の人は、こんなところでは話し出さないと思うわ」

ひろ子は、小さくほほえんだ。

「それに……いまはあなたもわたしも、おなかがすいているでしょう？ わたしはどうしても、これになつてしまうからね」

ひろ子は、指さきで頬つぺたを涙がころがりおちる形をしてみせた。

西へ向つて真直に二本、アスファルト通がとおっている。左右は、おそろしく高い切り通しの石だたみで、二つの崖をつなぐ鉄の陸橋が、宵空に太く黒く近代都市らしい輪郭を浮き出させている。この高台は、昔東京の海がずっと深く浅草附近まで入りこんでいたそれより昔、武蔵野の突端をなして、海へきつ立っていた古い地層である。

低地にひろがった尾久方面も、高台も、今は一面の焼け野原となっていた。アスファルトの道ばたには、半分焦げのこった電柱だの、焼け垂れたままの電線、火熱でとけて又かたまつたアスフ

アルトのひきつれなどがあつた。焼トタンのうずたかい暗い道の上で、通行人は互に近づく黒い影を目じるしにしてよけあつてとおつていた。

「——暗いねえ」

ゆつくりした足どりをなおおそくして、重吉がおどろいたように云つた。

「大丈夫かい？」

「大丈夫よ。暗いけれどこつちの道は案外いいのよ」

「それにしても——こんなところを、ひろ子一人でなんか歩いや駄目だ」

二人で歩ける今、重吉が、一人でなんか歩くなと云つてくれる

この夜道を、ひろ子はこれまで幾度ひとりで通らなければならなかつたろう。リュックを背負い、もんぺにはいた靴をふみしめ、つよく振る手で薄気味わるさを追っぱらうように力んで、通った。自分のその姿が、はつきりひろ子の心に浮んだ。その姿を仔細に追つてゆくと、そこには電車の中で重吉が不意に云い出した批評につながる自分の在ることが、ひろ子自身にもさとられるような気がするのであつた。

「さつき電車の中でしかけた話ね、覚えていらつしやる？」
ひろ子が訊いた。

「後家のがんばり、かい？」

二人が話しやめたその位置で、重吉は、はつきりと又その表現

をとりあげた。

「わたしには、ね。 どうしてああ急におつしやったのか、きつかけが見つからないのよ。 さつきから考えているけれど。 ……でも、きつとそういうところが出来ているんでしょね」

たとえば同じ夜の道を、こうして二人で歩いている。 その歩きぶりも心持も、一人で出来るだけ早くといそいで歩いているときと、どんなにちがうことだろう。 ひろ子はそれも一つの例として話した。

「自分でどこをどうがんばっているのかわからないところが、つまりくせものね」

「心配しなくてもいいんだ。 ただ、これまでひろ子は、云わば一

人ぼっちでがんばって来たんだから、どうしても、そういうところも出来たのさ。又それだからこそ、もったというようなところもあるんだし。——しかし、もう条件が変わったんだからね……そうだろう？」

「ほんとねえ」

うれしい方へ条件が変わって僅か半月ばかりのこの頃。それにくらべて条件が変わるとすれば、より悪くしか変りようのなかったこれまでの十数年間。

「なんて云っていいかわからないようだわ。一層、一層、あなたの細君であろうとして、そのために、そんながんばりが身につくなんて、……」

「ああいう時代だったんだから無理もないさ。どつちを見ても崩れていて生活の基準がなくなつた中で、謂^{いわ}ばそれを自分から押しやることで、どうやら自分を真直にもつて来たというところもあるんだから」

話しながら二人がのぼりかかっていた大きい勾配の坂の途中で重吉が立ちどまつた。そしてひろ子に訊いた。

「この坂は、どの坂だろう」

「――どの坂って？」

「もとの家へゆくのに、いつも通つた坂があつたろう？ あれはどの坂かい？」

「ああ、あれは、この坂よ」

「これっぽっちの狭い坂だった、あれかい？　ごちやごちや店なんか並んだ……」

「そうなのよ。すっかり変っちゃったでしょう。あの頃はまだずつと急だったしね」

「そうか！」

さも合点がいったように、

「それでやっとわかった」

重吉は又歩き出した。

「帰って来た日、むこうの角から入ってこの坂まで来たんだよ、多分この見当だと思うのに、坂の様子がまるつきりちがうもんだからそれで又すっかり迷っちゃったんだ」

ひろ子たちが今住んでいる弟の家は、その坂をのぼって少し行つた焼けのこりの一郭にあつた。十月十四日の朝、綱走から上野へついた重吉は、十三年前ひろ子とはじめて持った家を目当にさがして来て、三時間もその辺をぐるぐる迷つたのであつた。

おそい夕飯をすましてから、重吉は、ひろ子が重吉の家からもらつて来ていたはつたい粉をたべている。もとは客間に使われていた洋風板じきの室に食卓を入れて、食事にもお客用にも使つて二人は暮しているのであつた。

格別、彼のために新調されたのでもない座布団の上にあぐらをくんで、うまがつて、はつたい粉をたべている重吉を、ひろ子は、飽かず眺める、という字のままのころもちで見まもつた。

今夜に限らず重吉と一緒に食卓に向つてるとき、ひろ子の心にはいつも真新しい感動があつた。こんなに自然な男である重吉。簡単な、いもの煮たのさえ美味^{おい}しがって、友達と一緒に妻と一緒にたべることを愉快がる重吉。自然なままの人間に、こわらしい罪名をつけて、たった四畳の室へ何しに十二年もの間、押しこんで暮させたのか。そこにどんなよりどころがあつたのか。権力だからそれが出来たというならば、その不条理が不審でたまらないのであつた。

「もういいの？」

「ああ、もういい」

「——さっきの話——あの、がんばりのことだけれど、よく云つ

て下すったわね」

重吉は、ちよつと改まつた視線でひろ子を見ていたが、

「でも、さつきひろ子は泣いたんだろう」

いくらか、からかい気味に云った。

「それは泣いたわ。泣けるのがあたりまえよ。そうじゃないの。だから、よく云つて下すつたというのよ。これから、何でもあなたの氣がついたことはみんな云つて頂戴ね。これは本当のお願いよ」

手紙ばかりで暮した年月は、それらの手紙がどんなに正直であつたにしろ、整理されたものであるにちがひなかつた。その意味では、ひろ子が重吉に示す生活感情も計らぬきれいごととなつて

いるとも思えた。

「わたしは、何でもよそゆきでなく自分があるとおりにするからね。いやだと思いいになることがあつたら、どんなにべそをかいてもいいから、云つて頂戴。腹の中で、ひろ子というのはこういうんだな、なんかと思わないでね」

「いつか、そう思ったことがあつたかい？」

「これまではなかったわ。段々いそがしくおなりになるでしょう？　こんな話をゆつくりしていられなくなるのは見えているのよ。ですから、それまでに、痛棒はたっぷりほしいのよ」

「よし。わかった」

ひろ子は、重吉がかけている深い古い肱かけ椅子の足許に足台

をひきよせてその上にかけ、鼠がかじった米袋の穴をつくろつていた。小切れを当てて上から縫っている手許を見おろしていた重吉が、

「つぎは、裏からあてるもんだよ」

と云った。いかにも、それだけは確實だ、という云いかたで、ひろ子は思わず笑い出した。

「どうしてそんなこと知っていらつしやるの」

「和裁工だったんだぜ。ひろ子といえども、裁縫で五円八十銭稼いだことはなからう」

重吉は、

「僕がやってやろう、見ていてごらん、うまいんだから」

袋をとつて、ひっくりかえして、内側からつぎきれを当てて、縫い出した。つかみ針で、左手の拇指と人さし指のはらでおさえた布の方へ針をぶつけてゆくようなぎごちない手つきで、しかし一針一針と縫ってゆく。はじめ笑つて見ていた口元がかすかに震えて来て、ひろ子は深く唇をかんだ。口許を力ませるような表情で、濃い睫毛を伏せ、針を運んでいる重吉のうしろに、ひろ子はまざまざと牢獄の高い小さい窓を見た。そこに鉄格子がはまつていて、雲しか見え、オホーツク海をわたって吹く風の音しかきこえない高窓を見た。その下に体の大きい重吉がはげた赭土色あかつちいろの獄衣を着て、いがぐり頭で、終日そうやって縫っている。重吉の生きている精神にかけかまいなく、それが規則だからと、朝ご

とに彼に向つてぶちこまれるボロ。どんな物音も立たない、機械的な、それだから無限につづいてゆく、惨酷さ。まるで、感傷がなく、ユーモアをもつて縫っている重吉が、最後の糸どめをするのをひろ子は待ちかねた。そして、

「見せて」

手にとりあげて、それを見た。針めがそろっている。ひとつひとつは不器用な針目だが、それは律気にそろっている。そろった針目は、ひろ子の目に、重吉が坐らされていた板じきの上の薄べりの目とも映った。

「うまいだろう？」

「うまさすぎるわ、でもね、わたしはもう一生あなたには針はもつ

て頂きたくないわ」

ひろ子は立つて行つて 硯箱すずりばこをもつて来た。

「これはこうしておくの」

その日の日づけをかいて、和裁工石田重吉記念作品と、つぎきれの上に書きつけた。

さきへ二階へあがつて、ゆつくり床をのべながらひろ子は、朝からのことを思いかえした。すべてのことが、重吉に云われた後家のがんばりを中心と思いめぐらされるのであったが、並んだ二つの臥床ふしを丁寧おどろにこしらえて行くうちに、ひろ子の心に、次第に深まる驚きがあつた。ひろ子にとって、ずばりと後家のがんばりを警告してくれるのが、良人である重吉よりほかにない實際だと

すれば、本当に後家になった日本の数百万の妻たちには、誰が親身にそのことを云ってくれるのだろう。一生懸命に暮せばこそ身につきもするそういう女のがんばりについてその一途さにねうちがあるからこそ、一方のひずみとして現れるがんばりは、もっとひろやかで聴くより柔和なものに高められなければならないのだと、誰が、良人のいない、暮しのきつい後家たちに向つて云つてくれるのだろう。そして、がんばらずに生きられる条件を見出してくれるのだろう。それを思うと、自分をこめて、ひろ子の眼ににじむ涙があつた。

床の上に立つて着換えをする重吉に、寝間着の紐をわたしながら、ひろ子は、愛称のようにゆつくりと、

「石田さん」

重吉の姓をよんだ。

「わたしは、あなたから後家のがんばりを云われるのだと思うと、
本当の後家さんにすまないように思うわ。知っていらっしやる？
つやちゃんだつて後家さんなのよ」

重吉の弟の直次は、広島で戦死したのであつた。

三

遠い郊外へ出勤する重吉の外出が、段々規則的になり、来客が
益々ふえ、隠されていた歴史の水底から一つの動きが、渦巻きな

がらその秋の日本の社会の表面に上昇しはじめて来た。十月十日に解放された徳田・志賀の名で発表されたパンフレット型の「赤旗」は重吉がかえって間もなく出版され、広い範囲での話題となっていた。其を読むほどの人々は、様々な期待、要求、満足、不満足に、おのずからこの十数年間濃くされて来た個人個人の気質や生きこしかたの色と匂いを絡み合わせて、其について語っていた。忙しくなつてゆく迅さは、重吉が市中の混雑や、つつけんどんな乗物の出入りに馴れるよりも急速であつた。永年長い道を歩いたことのなかつた重吉は、怪訝けげんそうに、

「変だねえ、どうしてこんなところが痛いんだろう」

靴下をぬいで、ずきずきうず疼く踵をおさえた。

「やっぱり疲れるんだろうか」

「そうですね！ あれだけの間に、わたしたちが会って話の出来た時間が、一体どの位あったとお思になる？ たった百八九十時間ぐらいよ、まる八日ないのよ。ですもの……およそわかるわ、一日にどんなに少ししか歩かなかったか……」

前の晩、おそくまでお客があつて、その朝、ひろ子は、起きぬけからすこしあわてた。重吉は、入念に新聞をよみ、紙を出して何かノートを書きつけ、その間には荒れている庭を眺めて、

「あの樽、何か埋めていたのかい」

掘りだしたまま、まだ榎まきの樹の下にころがされている空樽に目をとめたりした。西日のさす側の枝から見事に紅葉しかけている

楓^{かえで}が秋の朝風にすがすがしかった。

弁当を包んでいると、置時計を見た重吉が、俄に、

「ひろ子、あの時計あっているかい」

と云った。

「あっていると思うわ」

「ラジオかけて御覧」

丁度中間で、いくらダイアルをまわしても聴えて来る音楽もなかった。重吉は、いそいで紙片をまとめて身支度にとりかかった。ひろ子は、急にとりいそいだ氣になつて、

「一寸待つて。わたし、まだなんだから」

もう一つ自分の弁当をつめた。その日は、ひろ子も同じ方角に

出かけなければならぬのであつた。一緒に出かけようとばかりせき立つて、ひろ子が食卓のまわりでのぼせていると、重吉が、「ひろ子、ここが駄目だよ」

ぶらぶらしてはまらないカフス・ボタンの袖口をつき出した。洋服を着はじめてから日のたたない重吉には、あちこちで止めたり、しめたりするボタンやネクタイが苦手で、支度にはいつも閉口した。シャツのカフスがどう間違えて縫ったものか特別せまくて普通にボタンをとめてからでは手をとおしくかった。

ひろ子は、友人の贈物である綺麗な細工のボタンを、粗末なシャツのカフスにとめた。うしろの衿ボタンも妙になつてカラーがさか立っている。重吉は自分のまわりを動くひろ子の頭越しに時

計を見ながら、いかにも当惑したように、

「時間がないな」

と云った。

「九時半までに必ず行かなけりやならなかつたんだ」

「まあ！ あすこまで二時間かかるでしょう。困ったわ。それなら、はつきり云っておいて下さればよかったのに。——いつも通りかと思つた」

なおあわててひろ子は、半分ふざけ、半分は本気で重吉の大きい体をつかまえ、少し荒っぽく、

「——こつちを向いて」

カラーをつけ、

「こんどはこっち」

これを前だとめネクタイをしめさせた。

「自分でカフス・ボタンもつけられないなんて、わるい御亭主の見本なのよ」

重吉は迷惑げに、あちこちまわされて、支度が終ると、すぐ出て行つた。上りぐちで、

「おいてきぼりになっちゃった！」

そう云いながらひろ子が、重吉の帰る時間をきいた。

「何時ごろ？　いつも頃？」

これも貰いもののハンティングのつばを、一寸ひき下げるようにして、重吉は無言のまま大股に竹垣の角をまわつて見えなくな

つて行つた。ひろ子は、暫くそこに佇んだまま、むかごの葉がゆれている竹垣の角を眺めていた。重吉は、口をきかずに出て行つた。意識した手荒さでまわした重吉の体の厚みが、手のひらに不自然に印象されて、それはひろ子のこころもちをかげらせた。

自分の用事がすんで、ひろ子が帰つたのは五時すぎであつた。

御飯をたくことと、おつゆのだしをとつておくことだけをいつも頼む合い世帯のおとよに、

「ただいま。——石田、かえりました？」

ききながら、ひろ子は上り口を入つた。

「まだですよ」

「そう。——」

「だしは七輪にかけてありますから……どなたかお客さまです」

がらんとした室に、ひろ子の又またい従弟に当る青年がひとりで坐

っていた。樺太の製紙会社につとめている父親や、引上げて来た母親、子供たちの様子をきいたりして夕飯のしたくが終ったとき、敷石の上を来る重吉の靴音がきこえた。

ひろ子は、上り口へかけて出て行つた。

「おかえりなさい」

重吉は黙って、踵と踵をこすり合わせるようなやりかたで靴をぬぎすてて上り、ハンティングを、その帽子かけにかけた。いつもの重吉は、書類入の鞆から帽子から、ひどくくたびれたときには、その場で窮屈な上着までひろ子の腕へぬぎかけるのであつ

た。

「けさはよつぽどおくれて？」

「一時間ばかりおくれた」

青年のいる室へ入って、重吉は、簡単に挨拶すると、そこに来ている雑誌の封をあけて目をとおしはじめた。

「お着かえにならないの」

「……………」

重吉は、洋服のまま、どうしたのか、ひるの弁当があまっていたのを靴から出して、先ずそれをたべはじめた。

「どうして？——こっち上ればいいのに」

「いいんだ」

つとめて、ひろ子は若い又従弟と口をきいて食事をすませた。

重吉は、すぐ、

「あがるよ」

鞆をもつて、二階へ登って行つた。とりのこされたひろ子は体じゆうがよじれるように苦しくなつた。

行つてみると、重吉はぬいだシャツや服を机の上につみ上げて、そのよこのところに本をのせて見ていた。ひろ子は、みんなどけてそれを衣紋竿えもんざおにつるした。

「——ね、どうなすつたの？」

「どうもしない」

「いいえ。こんなのあたりまえじゃないわ……いつものようじゃ

ないわ。ね、どうして？」

重吉は椅子の上で顔を横に向け、ひろ子を見ないようにしている姿勢のまま、

「どうもしない。きょうから、何でもみんな自分ですることにきめたんだ」

と云った。

「……………」

「すっかり、考え直したんだ。何の気なく、してくれらるとおりして貰っていたんだが。俺も甘えていたんだ。——わるい亭主の見本だと思われているとは思わなかった」

冗談よりほかの意味はありようもなく云った言葉が、重吉をそ

んなに傷けたことが、ひろ子をおそれさせた。^{きずつ}

「御免なさい。わたしふざけて云ったのに——」

「——しかし、ひろ子はしんではおそらくそう感じているところがあつたんだ。……世間には良人のことは何でもよろこんでる細君もあるんだろうが。——自分のことを自分でするのはあたり前なんだから、もうすっかり自分でする——監獄じゃそうしてやって来たんだ」

ひろ子は、思わず重吉の両肩をつかまえた。

「変よ、監獄じゃ、なんて！　それは変よ！」

涙をあふらしながら、ひろ子は恐怖をもつて感じた。どういう複雑な動機からか、ともかく重吉は、ひろ子が想像出来るよりも

遙かに深い幻滅のようなものを、二人の生活について感じたのだ、ということ。ひろ子は絶望感からそのまま立っていられなくなつた。前の畳へ崩れこんで重吉の膝の上に頭を落した。

「考えて頂戴。あなたのことはあなたがなさい、というような心持で、どうして十何年が、やって来られたのよ」

ひろ子がそんな石のような女で、身のまわりのことにも今後一切手をかりまいと思いきめたなら、その重吉にとって、ひろ子の示す愛着は、どんな真実の意味があり得よう。二人の自然な愛情はなくて、重吉が決して惑^{わく}溺^ですることのない女の寧ろ主我刻薄な甘えと、ひろ子がそれについて自卑ばかりを感じるような欲情があるというのだろうか。

「あんまり平凡すぎる！」

ひろ子は、激しく泣きだしながら頭をふった。

「わたしは、いや！　こんなの、いや！　あんまり平凡だ」

それにしても、ひろ子には分らなかつた。重吉が、こんなに永年の間、互に暮して来たあげく、突然、云つてみれば、今瞼から鱗が落ちた、という風にそれほど深い幻滅を発見したというのは、^{うろこ}どういふ理由があるのだろう。重吉もひろ子も、劣らず自然なままの生れつきであつたから、一方で離反して、一方で繋がれてゆくといふようなゆがんだ人工の夫婦暮しは出来なかつた。眞実重吉の幻滅がとりかえせないものならば、それはひろ子にとつても、これからの生活は成り立たないということなのであつた。

ひろ子は泣きながら、泣いている自分の頭が重吉の膝の上にあること、重吉はそうして泣くひろ子を、自分から離そうとしていないことを、とりすぎる一本の綱のように鋭く感じた。ひろ子のこの苦痛の深さに、一心に暮した十二年の歳月が折りたたまって投影しているとおり、重吉の索漠たる思いにも、同じ長い年月に互って生活して来た彼のひどい環境の照りかえしが決してないと、どうして云えよう。

閃く稲妻のようにひろ子の心を一つの思い当りが走った。それが、泣き膨はれたひろ子の精神の渾こんとん沌を一条の光となって射とおした。ひろ子は、重吉の手をとつて、

「ね、云つてもいい？」

ときいた。

「いいさ」

「わたしが、あなたの気もちを傷けたのは本当にわるかったわ。

どうか許して頂戴。——そしてね、あなたは、あんなに永い間牢屋に暮していらしたでしょう？ あすこには、決して、あなたに對する絶対の支持というものは存在しなかったのよ。いつだって、二重の、いつでも逃げ腰の親切か、さもなければはぐらかしかなかったのよ。そうでしょう？」

「……………」

「絶対の支持、ということがわかる？ その幅の中で、どんなに憎まれ口をきいたにしても、馬鹿をしたにしても、それでも、な

お絶対の支持であるという、そういう絶対の支持がわかる？」

ひろ子は泣き泣き云った。

「ひろ子の支持は、そういう絶対の支持だということがわかる？」
永い間沈黙していた後、重吉は、はじめて顔を向けて、正面からひろ子を見た。ああ、やつと重吉にとってひろ子は再び見るに耐えるものになった。ひろ子は、両手の間に顔を挟んだ。

「ね、わかる？」

「——絶対の支持なら、どうしてあんなことを云うのかい」

「わるい御亭主の見本？」

「そうさ」

「あら、だって母親だって自分の可愛い児に云うわ、わるい児の

見本ですよ、ぐらい……」

「そういう調子じゃなかった」

ひろ子は、じつと重吉の顔をみつめた。苦しく、重く閉ざされていた重吉の表情はほぐれはじめて、二つの眼の裡にはいつもの重吉の精気のこもった艶が甦っている。ひろ子は、うれしきで、とんぼがえりを打ちたいようだった。

「生きかえって来た、生きかえって来た」

ひろ子は、小さい声で早口に囁いた。

「なにが？」

「——わたしたちが……」

重吉は、やっとわかったがまだ怪訝だという風に、

「しかし、ひろ子の調子に、そんなユーモラスなところはなかったぜ」

と云った。

「そうだったこと?——」

ひろ子は、恐縮しながら、いたずらっぽく承認した。

「そこが、つまりあなたのおっしゃるがんばりの情けなさなのね、きつと。——でも、もうすこしの御辛棒よ、じき無くなってよ」
重吉を励しでもするように云った。

「あなただって相当強襲なんですよもの」

こわい、絶壁をやつと通過したときのように、ひろ子は体じゅう軟かに力ぬけがした。ひろ子は、重吉の膝を撫でた。

「一日じゅう、あんないやな気持ちで仕事していらしたの、わかる
ったわねえ」

「そうでもないさ」

率直に重吉は云った。

「家の近くへ来るにつれて、だんだんいやな気持ちになったんだ」
「そりやそうね、ああ思えば、もう本質的に家なんてどこにもな
いんですもの」

うちがない、ということとは、ひろ子にどっさりのことを思わせ
た。十月十日に解放された重吉の同志たちの主だった人々は、殆
どみんな妻をもたず、従ってうちをもっていなかった。うちも妻
も、闘争の永い過程にいろいろな形でこわされ、とられた。人間

らしさを極限まではぎとられた。その痛苦から屈従させようと試みられた。ひろ子にしろ、つかまる度に、女の看守長にまで云われることは、重吉の妻になっているな、ということだった。一層軟かく重吉の膝に頭を埋めながら、ひろ子は、

「げんまん」

重吉に向って小指をさし出した。

「二度ともう憎らしいことは云わないから、あなたも約束して。さっきのようなことは云いつこなし」

自分たちの生活を毒し、あわよくば其をこわす力は、決して無くなっていない。ひろ子は身をひきしめてそのことを思った。正面から攻撃しなくなったとき、それは、嘗て打撃を加えたその痕

跡から、そのひずみから、なお襲いかかつて来る。ひろ子は、頬をもたせている重吉の左の膝の上の方を考え沈みながら撫でた。そこに、着物の上からもかすかにわかる肉の凹^{へこ}みがあつた。大腿のところ、木刀か竹刀かで、内出血して、筋肉の組織がこわされるまで擲^{なぐ}り叩いて重吉を拷問した丁度その幅に肉が凹んでいて、今も決して癒^{なぐ}らずのこっているのであつた。

四

腰かける高いテーブルで、重吉が書きものをしていた。その下に低い机をすえて、ひろ子が、その清書をやっていた。

「何だか足のさきがつめたいな」

重吉が、日ざしは暖かいのに、という風に南の縁側の日向を眺めながら云った。十一月に入ったばかりの穏やかな昼すぎであつた。

「ほんとなら今頃菊の花がきれいなのにね」

毛布を重吉の足にかけながらひろ子が云った。

「この辺は花やもすつかり焼けちまったのよ」

焼跡にかこまれたその界隈かいわいは、初冬のしずけさも明るさも例年とはちがったひろさで感じられた。夜になると、田端の汽車の汽笛が、つい間近にきこえて来た。

「久しぶりで、たつぷり炭をおこしてあげたいけれど、あんまり

のぞみがないわ」

「いいさ。寒けりやいくらでも着られるだけ結構なもんだ」

ペンをもったなり口を利いていた重吉は、又つづきを書きはじめた。長い年月、ほんとうに温く、人間らしくあついものを食べることもなく暮して来た重吉は、今のところ、何でもあつくして、それからたべるのが氣に入った。揚げたての精進あげまで、

「やくと、なおうまいね」

電熱のコンロに焙^{あぶ}つてたべた。

「あつくしようよ」

おつゆでも、お茶でも、生活の愉しきは湯気とともに、というように、あつくするのであった。ひろ子には、そういう重吉の特

別な嗜好が実感された。さつき、コンロに湯わかしをかけたとき、

「たしかに俺はこの頃茶がすきになったね」

重吉が、自分を珍しがるように云った。

「もとは、ちつとも美味^{うま}いなんと思わなかったが……」

「この頃はみんなそうなのよ。ほかに何にもないんですもの。お茶の出しがらの葉っぱ、ね。あれを、はじめの時は馬の餌に集めていたけれど、あとでは人間もたべろ、と云ったわ」

「僕はなかでくったよ、腹がすいてすいてたまらないんだ」

暫く仕事をしつつけて、ひろ子によみとれない箇所が出て来た。

「これ、何処へつづくのかしら」

下から消しの多い草稿をさし上げて見せた。

「ポツダム宣言の趣旨に立脚して……その次」

行を目で追つて、

「ここだ」

重吉は、もっているペンで大きいバツテンをつけて見せた。

「今後、最も嚴重に——」

「そこまでとぶの？　八艘^{はっそう}とびね」

二人は又無言になった。写し役のひろ子の方に段々ゆとりが出来て来た。晩の支度に階下へおりたり、お茶をいれたりしながら、仕事をつづけ、重吉は、わきでひろ子がそういう風に時々立つたりにすることがまるで気にならないらしく、ゆつたりとかまえ、しかも集注して、消したり書いたり根よく働いている。

頬杖をついて、ひろ子はその雰囲気にとけこんだ。こんなに楽
な、しかもしつとり重く実った穀物の穂をゆするようにたつぷり
充実した仕事のころもちを、経験したことがあつたらうか。襖
のあいている奥の三畳へ視線をやつて、ひろ子は暫く凝^じつとそつ
ちを眺めていた。北側の三畳の障子に明るく午後の日ざしがたま
つていて、その壁よりに、一台の折りたたみ寝台が片づけてあつ
た。三つに折りたたまれて錯綜して見える寝台の鉄の横金やそこ
ろどころ錆びたニッケル色のスプリングがひろ子のいるところか
らよく見える。重吉がいた網走へ行こうとしてこの家を出てゆく
とき、ひろ子はその寝台を折りたたんでその隅に片づけた。それ
なりそこで、きょうまでうつすり埃をかぶっている。重吉がそれ

を見つけて、

「便利なものがあるじゃないか。一寸休むとき使おうよ」

そういったときも、ひろ子は、すぐそれを持ち出す気になれなかった。

この一人用の寝台の金具を見ると、ひろ子がきまつて思い出す一つの情景がある。それは東に一間のれんじ窓があつて、西へよつた南は廊下なしの手摺りつきになつた浅い六畳の二階座敷である。れんじ窓よりこの寝台が置かれて、上に水色格子のタオルのかけものがひろげてあり、薄べつたい枕がのせられてある。入ったばかりの右側は大きい書物机で、その机と寝台との間には、僅か二畳ばかりの畳の空きがある。その茶色の古畳の上にも、ベ

ツドの上にも机の上にも、竹すだれで遮りきれない午後さえぎの西日が夕方まで暑気に燃えていた。その座敷は、目には見えないほこりが焦げる匂いがしていた。救いもなく空気は乾燥していた。そして、西日は実に眩まぶしかった。

それは、ひろ子が四年間暮した目白の家の二階であつた。二階はその一室しかなくて、ひろ子は、片手にタオルを握つたなり、乾いた空気に喘ぐような思いで仕事をした。

その座敷のそとに物干がついていた。物干に、かなり大きい風知草の鉢が置かれてある。それは一九四一年の真夏のことであつた。その年の一月から、ひろ子の文筆上の仕事は封鎖されて、生活は苦しかった。巣鴨にいた重吉は、ひろ子が一人で無理な生活

の形を保とうと焦慮していることに賛成していなかった。弟の行雄の一家と一緒に暮すがよいという考えであつた。けれども、ひろ子は、抵抗する心もちなしにそういう生活に移れなかつた。二十年も別に暮して来た旧い家へ、今そこに住んでいる人々の心もちからみれば、必要からよりも我から求めた苦勞をしていると思われている条件のひろ子が、収入がなくなつて戻つてゆく。それは耐えがたかつた。姉さん来ればいいのにと行雄も云っているのに行かないのは、体裁をかまっているひろ子の俗っぽさだ。そう重吉の手紙にかかれていた。

三年前にも一年と数カ月、書くものの発表が禁止された。しかしそのときは、ひろ子一人ではなかつた。近い友人たち何人かが

同じ事情におかれた。その頃は、まだ文学者一般に、そういう処置に対して憤る感情が生きていて、ひろ子の苦しさも一人ぎりのものではなかった。それについて話す對手があつたのであつた。

三年たった四一年には、ぐるりの有様が一変していた。作品の発表を「禁止されるような作家」と、そうでない作家との間には、治安維持法という鉄条網のはられた、うちこえがたい空虚地帯が出来ていた。更に、一方には中国、満州と前線を活躍する作家たちの気分と経済のインフレーション活況があつて、ひろ子の立場は、まるで孤独な河岸の石垣が、自分を洗って流れ走ってゆく膨んだ水の圧力に堪えているような状態だった。

経済上苦しいばかりか、心が息づめられた。その窒息しかかつ

ている思いを、重吉に告げたところで、どうなろう。重吉に面会する数分の間、本当にその間だけひろ子は晴れやかになつて笑えた。重吉も晴々して喋るひろ子を見て、愉快になつた。だが巢鴨を出ると、よつてゆけるような友達の家は遠すぎたりして、行雄のところへ行き、自分の内面とかかわりようもない声と動きにみちた暮しの様を見ると、ひろ子は、せめてまだあの家がうちに、という風に気をせて目白へ帰るのであつた。

それにしても、何と二階の座敷は暑くて、乾きあがつていただろう！ 仕事の封じられた大きい机は、何と嵩ばつて、艶がなくなつていただろう。

或る晩、ひろ子は、心のもつてゆき場がなくなつて、駅前を通

りへふらりと出て行つた。よしず張りの植木屋があつて、歩道に風知草の鉢が並んでいた。たつぷり水をうたれ、露のたまつた細葉を青々と電燈下にしげらせている風知草の鉢は、異常にひろ子をよろこばせた。どうしてもそれが欲しくなつた。ひろ子は、亢奮した気持でその鉢を買い、夜おそく店をしまつてから運んで来て貰つて、物干においた。

洗濯物をどつきり干しつらねるというような落付いた日暮しを失つていたひろ子は、がらんとした物干に置かれた、その風知草に、数日の間、熱心に水をやった。けれども、益々苦しさが激しく、しず心が失われてゆくにつれ、哀れな風知草までが苦しい夏の乾きあがつた生活にまきこまれて行つた。風知草はいつの間に

か、枯れ葉を見せはじめた。ひろ子は、けわしい眼づかいでそれを見ていた。が、水はもうやらなかった。

あの夏、たとえば、どんなに一人暮しの食事をして暮していたのか、今になってひろ子には思い出せもしなかった。思い出すのは、却って、省線の巣鴨駅に咲いていた萩の花枝である。省線の電車が、颯^さつと風をきって通過したとき、あおりで堤に咲きつらなっていた萩の花房が瞬間大ゆれに揺れて乱れた。病的になっていたひろ子の神経は、その萩の花の大きいゆれをわが魂の大ゆれのようにはつと感じた。自分の哭^なこうとする心がそこにあらわされたように感じた。

そういう夜と昼、ひろ子が臥^ねて、起き出たのが、あの寝台であ

った。寝台をみると、乾きあがって、心のやり場もなかった四年の夏がそこにまざまざと^{うか}泛び上るのであった。

寝台を買ったのは三五年の初夏であつた。或る早朝、ひろ子がたつた一人そのベッドに寝ていた二階の屏風越しに、ソフト帽の頭がのぞいた。それは、ひろ子をつれてゆくために、風呂場の戸をこじあけて侵入した特高の男であつた。

風知草の鉢は、ひろ子が友人にゆずって出たその家の物干で、すっかり乾からび、やがて棄てられたのだが、ひろ子の記憶に刻みつけられているもう一つの風知草があつた。その風知草は、小ぢんまりした鉢植で、巢鴨の拘置所の女区第十房の窓の前におかれていた。出来るかぎりぴったりと窓に近づけて置いてあるのに、

風知草の細い葉のさきさえも戦^{そよ}がなかった。いつみても、どんなに待っていても、夜中でさえもその風知草の葉が動くということはない。夏は、六十八年ぶりという暑熱で、温室のように傾斜したガラス屋根の建物を蒸し、焙りこげつかせていたのに。――

ひろ子は思い出にせき上げた。総て、すべてのこういうことを、どうして重吉に話しかれるだろう。重吉が帰って、こうして、ひろ子の息づきはゆるやかになり、自分を崩すまいとする緊張から解放されて、はじめて、自分のこれまでの辛さや、それに耐えている女がはために与えるこわらしさを見ることが出来た。ひろ子をよく知っていて、つき合いの間には入りくんだいきさつもあつ

た或る作家が、短篇の中に気質のちがう姉妹を扱っていたことがあった。情感に生きる妹娘が所謂いわゆる身もちもいい、しつかりものの姉について「そりや姉さんは親類じゅうの褒めものなんだから」という意味を云うくだりがあった。第三者にはまるで、ひろ子にかかわりない一つの物語としてあらわされた会話であったが、ひろ子は、その作者がその作者のもちまえの声で、ひろ子に向って其を云っている響を感じたことがあった。そのとき、ひろ子は、その本を手にもって、永い間、その数行の文字を見つめていた。そのときひろ子の胸に湧いた云いつくせない感情は、口で話せるものだろうか。

ひろ子は立ちあがって、書いている重吉の肩へ手をやった。

「——どうした」

「小説をかかして」

ひろ子は重吉のあいている方の手をとった。

「ね、小説がかけられるように働かして。——お願いだから……」

亢奮こうふんしているひろ子の顔つきを見て、重吉はおかしみをこめ

た好意の笑顔になった。

「鎮まれ、しずまれ」

ペンをもっている指先で、ひろ子のおでこをまじないのよう
ぐりぐりした。

「それを云っているのは、俺の方だよ。かんちがえをしないでく
れ」

その時分、そろそろ新しい文学の団体も出来かかりはじめていた。十数年前にも一緒に仕事をしていたような評論家、詩人、作家などが、また集って、口かせのはずされた日本の心の声をあげようとしているのであった。

五

ひろ子は、行手の道の上にゆるやかな角度で視線をおとしながら歩いていった。おろしていくらもたたないのに、粗末な下駄は前がわれて、あぶなつかしかった。低い丘の起伏の間をぬっているその道は、土ほこりが深くてぽくぽくのなかにごろた石がどっさ

りころがつている。左手は、色づきはじめて灌木におおわれた浅い谷間になっていた。

ひろ子の歩きつきに、何となしおとなしいような懇ろなねんごような様子があるのは、下駄がわれかかっているからばかりではなかった。歩いているその道が、よその道路を通る事務的なころもちとはちがった気持をひろ子にもたせていた。その気持は、ずっと昔、小石川のある道があるとき、ひろ子の気分に湧いたものと何処やら似ていた。その道に重吉が住んでいた。ひた向きにその一点しか目ざしていないのに、外からはどこへゆくか一応分らないようにして歩いている。おもしろいその気持に似たところがあ

り、しかも、この道の上では、おのずとべつのはにかみもあつた。

その秋、自立会への道と云えば、普通の田舎道ではなかった。自立会を十月十日に解放された共産党員たちの住んでいるところと知っているほどの人々は、そこへゆく道、その道を行き交う人の通りに特別な思いをはらった。配給所へゆくのと同じ心でそこを通る人はなかった。よかれあしかれ、自分の生活と関係のある新しい動力の発源地をそこに感じ、その様子を知ろうとして、淋しいガード下から曲つて丘をめぐるその一本道へ出た。そこを歩くひろ子は、あんまり行く先がはつきりしているのと、いそいそしている自分があらわなのとを、はにかんでいるのであった。

行手の木立の間に、それらしい新しい建物が見えるところへ来た。すると、左手の草むらのうしろから、

「ひろ子さん」

大きい声で呼ぶ女の声がした。ひろ子は、道の上に立ちどまつて見まわした。

「ここです、お待ちしていたの、御弁当をたべながら——」

あわてて立つ拍子にとりまとめた紙包を、まだ胸の前にたくしこみながら、小さい男の子をつれた瀬川牧子が、高い草の間から歩いて出て来た。

「まあ。——どうして？ まち伏せ？」

牧子は数年このかた埼玉の町に住んでいて、滅多に会うことも出来なかった。

「思いがけないところから現れたのねえ」

「よかったわ、うまくつかまえられて」

上機嫌で牧子は男の児に、

「純ちゃん、これがおまくのおばちゃんよ、覚えている？」

と云った。三つぐらいの純吉が遊びに来たとき、ひろ子はその子と小さい枕をぶつけ合つて遊んだ。それが大變氣に入つて、おまくのおばちゃんという名をもらつたのであつた。

「きよう、こちらへいらつしやるとお友達から又聞きいたしましてね。お家までとてもゆけないし、こつちなら電車が国分寺まで来るから、思い切つて出て来たの、よかったわ、お会い出来て」
ほかに通る人のない道を、二人の女は五つの児の足幅にそつて歩いて行つた。

「元氣らしいわね——」

ひろ子は、牧子にはその意味のわかる笑いかたで、

「牧子さんだって、もう元氣だわ。ねえ」
と云った。

その初夏、空襲の間に会ったとき、牧子はやつれて不安な眼つきをしていた。埼玉でもその町は安全と云えず、食糧の事情もむずかしかった。牧子の不安は、そういう日常なのに、その会社づとめをしている瀬川泰二が、戦争も最後の段階にさしかかっていると云って、しきりに何か考え、牧子の知らない時間をよそで過して夜更けて帰るようになって来た。牧子は、

「もし又あんなことになったら、私たちの生活は今度こそどうな

るのかしらと思って……」

野良日にやけて、雀斑そばかすが見えるようになった顔を沈痛にふせた。

「瀬川はそれでいいかもしれないけれども——」

瀬川夫婦の友人に玉井志朗という男があつた。大学が同期で、学内運動の先頭に立っていた秀才であり、万事目に立つ男だったのが、つかまつた。これ迄、何年間ものがれていたのが不思議であつた。つかまつて、拘置所に入れられて、少くとも五年か七年帰れまいと本人さえ云っていたのに、急に出た。その男の伯父が、前法相であつた。入れかわりに、玉井のぐるりの友人は、一人のこさず被害をうけた。その前、一年半の実刑までを受けて出て来

た瀬川は、ただ工場へつとめて、やつとヤスリを使い覚えたというばかりなのに、つかまえられたばかりか予防拘禁所に三年も置かれた。大した理由はなくてお気の毒だ、と云いながら、三年置いた。牧子は瀬川の母、その姉、良人とまるで立場のちがう妹夫婦という錯雑した家族の間で、子供を育てながら精一杯の努力でやりくりして、瀬川の出て来るのを待った。瀬川は、前の冬にかえって、埼玉のそこへ勤めはじめていたのであった。

そのときも、ひろ子と牧子とは焼跡の通りを並んで歩きながら話していた。

「あなたの苦労は見ているから、いい加減が云えないわ。——でもね、牧子さん、どう？ あのない眼つきをした若い瀬川さんが、

俺はもう女房孝行だけして子を育てることにきめたよと云って、段々張がなくなつて、じじむさい男になつて行くのをうれしがつて見ていられること？」

牧子は、

「——そうねえ」

心から吐息といきをついた。瀬川の生きかたを理解し、瀬川の性格の美しさがわかつていても、くりかえし、くりかえし執拗に生活を破壊されることに牧子は殆ど耐えがたくなつて来ていたのであつた。

「年末になると、わたし段々おなかが重くなるし、そうすると又暫くお会い出来ないから、きょうこそと思つて……」

牧子は、いかにも心の祝いをあらわすように、

「これをおばちゃんに上げましょうね」

袋のよこにさし出ていた白い小菊の花束をくれた。

「いいにおい。——うれしいわ、丁度石田がねているから」

「病気がおわるいの？」

「足なのよ。痛くて歩けなくなつたの。たださえくたびれるのに、よく方角を間違えて、途方もなく歩いたりするんですもの」

道が二股にわかれて、一方の草堤に自立会と明瞭に書いて矢じるしをつけた立札が立っていた。ひろ子たちの前の方を、背広の男が一人ゆつくり歩いていた。遠くからその立札に目をつけているのが、うしろつきでわかった。あの人も行くのかしら。そう思

って見てみると、その男は立札のところで歩調をゆるめ、自立会という三つの字を改めてとつくりたしかめるように見て、それなり来た道をまっすぐ雑木林の方へおりて行つた。

太いタイアの跡が柔かい土にめりこんでついている。草道はそこから自立会の建物についてうねり、入口の前に通じた。

建物の横手に大型トラックが来ていて、手拭で頭をくると包んだジャムパー姿の若い人が三四人で、トラックの上から床しょうぎ凡をおろしているところであつた。

床凡は、粗末ではあるがどれも真新しく木の香がした。真新しいのは、その床凡ばかりでなかった。自立会という建物そのものが、出来たばかりというよりまだ半出来の真新しさで、広い畑か

ら敷地を区切っているあらい竹垣のうちには、ついきのうまでこつぱが散らばり、おが屑が匂っていたような様子がある。思想犯として刑期を終った出獄者を、そのあとまでもかためて住わせて思想善導をしようとして、本願寺が、この建物をこしらえた。国分寺の駅からよつぽど奥へ入った畑と丘の間の隔離された一郭として、これをこしらえた。十月十日、出獄した同志たちは、治安維持法撤廃によつて解体する予防拘禁所から、すぐ生活に必要な寝具、日用品、食糧、家具などをトラックにつみこんで、ここへ引越して来た。

重吉が綱走からもつてかえつて来た人絹の古い風呂敷包みの中には、日の丸のついた石鹼バコ、ライオンはみがきの紙袋、よれ

よれになった鉄道地図、そして、一まとめに大事にくくった書類が入っていた。その束の中に、一通の電報があつた。デタラスグカエレイエノヨウイモアル。同志二人の連名である。丁寧にたんで使いのこりの封緘ふうかんの間にはさまれているその電報を見たとき、ひろ子は、それを監獄で読んだときの重吉の思いを、そのまま、わが胸に感じた。網走へ。宮城へ。この電報はうたれた。その「イエ」は、この自立会のことであつた。

壁が乾きたての小アパートという風なその二階建の建物は、ひろい農地のまんなかにポツンとたつて秋日和に照らされている。門と玄関口との間が広場で、その一方に足場をほぐした丸太や板がつみ重ねてあつた。それによりかかったりして、十五六人の女

のひとたちがかたまっていた。まちまちの服装で、だれもかれも大きい袋持参で子供づれのひとも多い。子供たちは母のまわりをはなれないようにしながら、その辺で遊んでおり、赤ちゃんを洋装の上におんぶした若い母が、集って何か笑っている。一年生の遠足でもあるのをそこで待ちあわせている姉や母たちというその場の空気である。牧子は、

「大分お集りだこと……」

小声になって、自分と子供はひろ子からはなれるようにした。「わたしは、ただあなたにお目にかかりたくて来たんですから、皆さんとは別なんです。——お待ちしておりますわ」

「何にも大してむずかしい集りじゃないらしいことよ。かまわな

いじゃないの、いらつしやいよ」

ひろ子は、きょうの女のひと達の集りは、これから何か仕事を
してゆく人々の顔あわせのような意味のものとして、重吉から伝
えられていた。

「――石田さんでしょう？」

赤ちゃんおぶっている若いひとと話していた一人がひろ子によ
つて来た。

「もう眼はよくおなりになつたんですか」

ひろ子が熱射病で一時視力を失っていたことを知っていて、き
いてくれる人があり、又逆にひろ子の方から、

「まあ、来ていたの」

と、足早によつてゆく若い人々もあつた。

服装がばらばらなとおり、めいめいの生活もめいめいの小道の上に営まれて来ているのだけれども、きようは、そのめいめいが、どこかでつかまつていて離さなかつた一本の綱を、公然と手繰りあつてここに顔を合わせた、そういう、一種のつつましさと心はずみの混った雰囲氣が材木置場のまわり、婦人たちの間にただよつていた。何かのはじまりという期待と、同時に見当のつかなさもその顔々にあつて、それは、玄関口の敷居や階段につけられた土足のあとの一つ一つがまだ目新しい自立会の生活全体の新鮮さと、全く調和している。

日向をさけて、建物のひさしの下によつて佇みながら、ひろ子

は、この女のひとたちの集っている光景を美しいと思って眺めた。そこにはいろんな顔をした子供たちがいる。その母たち一つ一つの顔には生きて来た経歴が表情となって刻み出ており、しかも、このひとときの共通な信頼にくつろぎ、秋の日向にかたまっている。目に見えない旗日があった。ひろ子は、この広場の上を、いまおだやかにことなく過ぎてゆく時の流れの深みを、感動なしに感じる事が出来なかった。

「どうしたんでしょう……もうそろそろ二時ですよ」

腕時計を見た一人がつぶやいた。集りは一時から開かれる予定であった。

「きいて来ましょうか」

建物の中へその人が入って行つた。そして髯を生やした小柄な男と一緒に現れた。その髯をつけたひとは、ちよつと片手を腰に当てる恰好で、

「徳田さんは今地方から来た人と会議中ですから、それがすんだらすぐはじめます。すみませんがもう少し待つて下さい」

もう一遍、

「会議がすめば、つづいてすぐやりますから」

とくりかえした。よく響く声のたちで、眼や額の皮膚は清げなそのひとが、どういうわけか小柄な体にすこしあかつぽい大髯をつけて、年のわからないような威風あたりを払っている様子にはユ―モアがあつた。拘置所では世間並に髪を生やしておくのにさえ

蓄髪願という書類を出さなければならなかった。こんな大きい髯をもっているために、この同志はどんな書類を書き、人間は自分の髯については、それをのばしても刈っても自由な権利をもっているのだということについて、がんばって来たのだらう。人権に関する最初の戦利品というようなその髯をみて、ひろ子は微笑をおさえることが出来なかった。

髯の同志がきょうの世話役らしく、暫くすると階段の下から、「みんな、集って下さい」

また響きのいい声で呼んだ。牧子と子供とが、どうしようかしら、という風にひろ子のわきに立って躊躇しているのに目をとめた。

「あなたも来て下さい。遠慮なんかいりやしない」

一同は二階の一室の三方へ詰つて坐つた。建物のはずれの室で二方に大きい窓が開いた床の間つきの六畳であつた。二三人の男のひとたちが、床の間のかまちに腰かけて、三尺の入口のふみこみのところだけ、すこしすぎがのこされた。

「あ、ようござんす。それはまたそれで、あとからやりますから……」

ござんす、というところがいく分鼻にかかる訛^{なま}りを響かせながら、坐っているみんなに挨拶するようにして徳田球一が入つて来た。一方の窓を背にして置かれていた小机の前に坐つた。

「どうも今日はお忙しいところをすみませんでした」

女のひとたちは、そろって行儀よくお辞儀をした。又そろって頭をあげて、黙ったまま眼にちからを入れた表情で、カーキ色の国防服めいたものを着ている、はげ上った、精悍せいかんな風貌を見つめた。

「わたしは、外国へやられたり、牢屋へ入ったりばかりしていて、これまでに結婚生活をしたのは、たった七カ月ぐらいのもんでした。だから、御婦人の生活をよく知っているとは云えないかもしれないが、見ていると、実に日本の婦人の生活は過労です。気の毒にたえないほど疲れはてた状態だと思うんだが、どうですか」

赤ちゃんを背中から膝の上にだきとり、さもなければ牧子のように一人わきに坐らせて、もう一人はおなかの中で今育てている

というようなひとと幾人が加っている一同は、全く云われるとおりの面持で応えた。

「日本の男は婦人たちをもっと、しんから可愛がらなくちやいかんと思うんです。婦人の生活が、もっと合理的になるように、過勞しないですむように、大いに努力して、改善して行かなくちやならない」

そして、日本の社会の歴史の中で婦人がおかれて来た事情と、民主主義というものの、三つの段階と、それぞれの段階での婦人の立場が説明された。

婦人ばかりがぎっしりつまった狭い室だが、開けはなされた二つの大窓から流通する光線と大気とは、すがすがしくて、秋の午

後の清潔なぬくもりが室じゅうにとけている。窓からは遠く森や丘のつらなつた外景と、その上の空が見えていて、風景は骨組の大きい一人物の肖像のバックをなした。深くはげ上ったかたい前頭。熱中して性急に話すにつれて、その主張をききての心の中へ刺しこもうとするように動き出す右の手と人さし指の独特な表情。引きしまつて、ぼやついたところのない音声と、南方風なきれの大きい^{まなじり}眦。話につれて閃く白眼。その顔のすべての曲線が^{つよ}勁く、緊張していた。博い引例や、自在な諷刺で雄弁であり、折々非常に無邪気に破顔すると大きい口元はまきあがり、鼻柱もキューと弓なりに張っている。ひろ子は自分が美術家であつたら、この、独特な、がっちりと動的に出来上った人物をどういう手法であら

わすだろうと思った。一番ふさわしいのは、永年かかつて、漆で塗りかためた乾漆であると思えた。顔全体が赭みがかつた茶色で、眦を黒々と、白眼を冴えて鼻は大きく、そこにどんな雨がふりそそぐと、その雨は粒々になって鼻のさきや顎、額からころがりおちてしまつて、ちつともしんはぬれもくさりもしない乾漆のつよさ。同時に、そこからの様々な意志に向つても屡々それをはじき返すだろつような一徹さ。それはだぶついていつも曖昧さを漂わせている日本の名士づらに鋭く対照する面構えである。

この指導者が、縦横無尽という風に、ときに悪態さえ交えながら、しかも、婦人たちの本能的なつつしみには自然のいたわりをもつていて、荒つぽく、しかも淡白な話ぶりをもつていることに、

注意をひかれた。この人の悪口は、火の中から出したばかりの鉄^{かな}ごてのようだ。あつくて、ジリツとし、やけどをさせ、また消毒力ももっている。その味は、雨の滴もころがり落ちてしみこめない漆ぬりの風貌全体と、一致していた。

この人物をとり囲んで坐っている婦人たちは、何とぼんやりと軟かく、婦人たち、という一般性の中に自分たちの肉体と個性とをとかしこんでいるだろう。それにしても、一つ一つの顔は、人生の一つ一つを物語っており、婦人の様々な必要、希望、苦痛そのものの生きた姿として、そこにつめかけ坐っている。

「坊や、いい子でしょう、おとなに、お話しいてましようね」

もじつく子供にそう云って、その小さい肩へ片手をかけて、母

たちは熱心に傾聴している。自分で自分を解決してゆこうと欲している。そういう熱意があふれ感じられた。

ひろ子は、さつき建物のそとで待っているときにうけたと同じような感動を、一座の光景から感じた。婦人の集会でこれまでも一度もこんなに公然と、しかも新しい社会の建設にともなう婦人の将来を話し合う場所はなかった。

説明が終ってから、婦人の側からの発言が求められた。一座をみわたせば、そこに坐っているほどの女のひとたちは、みんな十分会合に馴れていると思えた。落付きのいい坐り工合が、それを語っていた。しかし、自分から発言する人はいなかった。そこにすべての婦人が苦しく、ちりぢりばらばらにさせられて凌いで来

た十数年の月日がてりかえされた。中国地方から来ていた一人のひとが、その地方の婦人の事情を報告した。ひろ子が名ざされて、一九三二年から以後の婦人の生活や文化の状況を短くまとめて話した。居合わせている婦人たちは、ひろ子が知っているよりもつと細部についてわかつている。けれども、十八年、監獄におかれた人は、それについて知っていて知っていないだろう。ひろ子は、そのことをことわって簡単に話した。

段々座がくつろいで、いくつもの声が物を云いはじめた。二十歳をすこし出たばかりぐらいのふつくりとして愛らしい人と、速記をやってもう仕事をたすけている二十四五のひととが、臨時の書記にきめられた。数人のひとが、又この次日をきめて集るとい

うことになった。婦人に関係する綱領がつくられる仕事があった。
「長井さん、あなたが引こんでいるってことはないわ、出なさいよ」

「ええ。——そうも思うんだけどね、……」

かたまつて話し合いながら階段をおりてゆく婦人たちは、主に、十月十日にかえった良人と一緒に、ここに住んでいる人たちであった。

会合がすむとすぐ下の炊事場で、これらの人たちが分担している活動がはじまった。台の下やその他の隅々はまだ真新しいコンクリート床で、みんながきまつて盛に往来するところだけ泥あとのついた炊事場で、ポンプをくみ上げる音、薪をわる音がおこつ

た。

夕闇の濃くなつたそとへ出ようとする玄関口の受付に、電燈がともっていた。そこにかたまっている若い人々の群の中から、つとはなれて、ひろ子の前に来て立つた人があつた。その顔は笑っている。瞬間、とまどつたひろ子は、目を据えてみて、

「まあ、ようこそ！」

覚えず片手をさし出した。太平洋戦争がはじまる前まで、新交響楽団の定期演奏会は前売切符を会員に送つた。その時分にひろ子もよくききにゆき、山沼というその青年も、大抵ききに来ていた。音楽をきいた帰りに、お茶をのみに歩いたりしても、山沼は、或る種の若い人のするような話しぶりをせず、いつも落付いた科

学者であつた。山沼に会つたのは古くて、ひろ子の友達の長男と同級のよしみで、落ちあつたのが縁であつた。こういう青年も、今はこの場所に来ている。しかも、受付にかたまつて、若い人々の中にいたときの空氣でみれば、山沼はおそらく、ひろ子などよりはるかにここに近く暮しはじめている様子だつた。

「何年ぶりでしょう。——お元氣でいいわね」

「石田さん、体どうですか」

山沼は、やはり、もとの通りやさしく、しかし必要なことしか云わなかつた。

「じゃあ、また」

「お元氣で。よろしく」

ひろ子は、待っていた牧子と一緒にになった。純吉は、暗いし眠いし歩けなくなつて、牧子におんぶされている。

「失礼ですがあの方、よく御存じですか？」

しめりはじめた草むらが匂う道を歩きながら牧子がきいた。

「よくつて云えるかどうか知らないけれど——なあぜ？」

「たしか、瀬川の御友達のかただったと思うんですけれど……わたしは御存じないんです」

きょうが目には見えない女と子供のひとつの旗日であつたように、誰の目にも見えないカドリールの輪がある。そうひろ子は思った。古風なカドリールの音楽につれて、手から手へ繋がりがあつて、送られて、まわつて、又新しい手につながれて動いてゆく、

見えない仲間のカドリールがあるという陽気な気がした。

「ここは、まるでノアの箱舟ね」

ひろ子が、笑って云った。

「何でも一応あるのね、あんなに大きい髯まであったわ。気がついたでしょう？」

「ほんと」

眠って軟くまるまる純吉をゆりあげながら牧子も笑った。そして、二人は明るいとき通ったほこりの深いゴロタ石の道を駅に向った。先へゆく一団の中に懷中電燈をもっている人があつて、その蒼い光の条が、^{すじ}ときどき前方の木立の幹や草堤の一部をパツと照らし出した。

六

重吉の左脚の筋炎は、一週間ほどして段々納まりはじめた。日当りのいい八畳に臥ている重吉の湿布をとりかえながら、

「こんどの足いたは、可哀想だったけれど、わるいばかりでもなかったわねえ」

ひろ子が、云った。

「こんなにして、昼間、しずかに臥ていらつしやると、しんから休まるでしょう？」

「たしかに、そういうところはあるね」

「世話するものがついていて、すこし工合をわるくして臥ているというようなきもちなんか、あなたとしてこんどがはじめてのねえ」

そういうことのほかに、幾日も外出しないで重吉がうちにいるということは、ひろ子にとっていろいろの意味をもたらした。

自立会へ行つた翌々日、卓の上に飾っていた牧子からの白い小菊の水をとりかえていると、臥ている重吉が、彼の公判に關係のある古い書類を出すように云った。

「在るんだろう？」

「それはとつてあるわ」

そう云いながら、余りしまいこんでいて、その紙ばさみがなか

なか見つからなかった。ベッドのしまつてある奥の小部屋で、いくつもの包みの紐をといて見ているうちに、必要な書類が出るより先に、一つの大型ハトロン封筒が出た。裏に、文学報国会と紫のゴム印が捺されてある。封筒の中にはひろ子の小説をうつした原稿が入っていた。

見つかった書類と一緒に、ひろ子はその封筒をもち出した。そして、重吉の仕事が一段落ついたとき、

「こういうものが出たわ」

その封筒を見せた。

裏をかえしてみても、重吉は、

「文学報国会とあるじゃないか、何だい」

と云った。

「なかを見てよ」

「その日の雪」という題と名だけはひろ子の自筆でかかれている三十枚ほどの小説を、重吉は怪訝そうに、ところどころよんだ。

「誰かに写させたのかい？」

「文学報国会で、戦争中、作品集を出す計画があつたんです。そのとき、わたしも会員だったから、作品一篇自選しておくれと云って来たの。それを送ったら、都合によってお返しするとかえして来たのよ」

「ひろ子が自分から送ったのか」

「ええ」

「わざわざ写させてか？」

「そうなの」

重吉は、口元に一種の表情をうかべて、少し念入りにその原稿を見直した。

「婦人雑誌に、何だか中途半端な小説をいくつか書いていたときがあつた、あの一つだね」

「そうなの」

原稿を床のそとの畳へ放り出すように置いた。

「ほかの人達もみんな出したのか」

「そうでしょうと思うわ」

「そして、その本は出たのかね」

「どうなのかしら——わたしは見たことないけれど……」

重吉はしばらく黙って、ひろ子の顔をまじまじと見つめた。ひろ子も、その重吉の二つの眼が、ふだんとちがって濃い睫毛に黒くふちとられた四角い二つのまなことなつて自分の上にあるのを見ていた。

「ひろ子、覚えているかい？ 俺が、文学報国会なんてものは脱退しろ、とあんなに云つたとき、何てがんばったか。——あなたには外の様子が分らないからって、がんばったんだぜ」

そのときのやささが忘られないように、重吉はひろ子の口真似をして云つた。

「そうなのよ。だから、わたし、この封筒もお目にかける気にな

ったの」

「わからないことがあるもんか——ちゃんとわかっていたじゃないか。——会費を送るのはやめたかい？」

「やめたわ。それは大抵の人がやめたでしょう」

もと文芸家協会として組織されていたものが、団体ぐるみ文学報国会というものになって、会員の一人だったひろ子も自然そこにひっくるめられていた。

またしばらく黙っていたのち、重吉がいかにも笑止千万という顔つきで、

「この小説、もしもさきでことわって来なかったら、ひろ子はのせていいと思っただのかい」

「のせたい、と思ったのじゃあないのよ。のせた方がいいだろう、そう思ったのね。あの時分……」

そのことが話したくて、ひろ子は、その封筒も重吉の前に持ち出したのであった。戦争が進み、情報局がすべての文化統制を行って、文学者やその作品をすっかり軍用に統一しはじめた頃、ひろ子たち一群の作家は、不安な状況に陥った。一九四一年の一月から、ひろ子にはつきり作品発表を禁止されて、それから却って、立場も心もちもきっちり定った。生活万端いかにも苦しいけれども、自分は自分なり、と落付くところがあつた。それまでの一年間ばかりはすべてが不安定で、ひろ子は、自分だけが、例えば文学報国会を脱退することで、一層くつきりと目立って孤立す

ることがこわかった。防空壕にたった一人で入っているより多勢
といたいところもちがあつた。文学の分野でも、情報局の形をと
つた軍部の兇悪な襲撃を、たった一人で、我ここに在りという風
に、受けとめる豪氣がひろ子にはなかつた。みんなのいるところ
に出来るだけ自分も近くいたいという人恋しさがあつた。けれど
も、重吉が、笑止千万という表情でひろ子を見るとおり、ひろ子
のそんなところもちは、書くものを御用に立てない以上、役人に
とっても笑止千万なことであつたろう。その頃文学報国会の役人
は、もう文学者ではなくて、役人どころか情報局の軍人が入つて
来ていた。

「あのころ、ひろ子が、つべこべ云うのが、不思議でたまらなか

った。実にはつきりしているんだもの。どうして、自分の亭主の頸に縄をかけているものを一緒になつてひっぱるようなことをするんだらうかと思つた」

「私もそう思うわ。だから、あなたは、よくああいう風におだやかに云つていらつしやれたとびつくりするの」

面会するとき、文學報国会を脱退するしないの話が出た時、重吉は、おだやかにそのことを云い、ただ、おどろくばかりの根氣づよさで、それをくりかえした。きようも。あしたも。又その次に会つたときも。ひろ子が、遂に云いわけや口実をこねくりまわす余地がなくなる迄くりかえした。

「わたしが、本当にすつきりしたのは、あなたの公判をずうつと

一緒にやって行つて、それが終つたときだつと思います。——手紙にも書いたわねえ」

「うん」

「前から、いつも云つていたでしょう？　自分という船の自分のコースがしっかり出来たら、どんなにいい気持でしょうって。岸沿いに、岸の灯にひきよせられたり、そうかと思うと濤に押しのけられたりしていないで、水の深い沖を自分のコースに従つて堂々進行する船になりたいって。——あなたの公判がすんで、江波土に行つたことがあつたでしょう。あのとき、はつきりわかつたのよ、自分がいつの間にかもう沖へ出たことが。自分のコースというものはもう辿られていたことが分つたの。……だから、わか

るでしょう？ 私がどんなにあなたの力^{りきそ}漕をありがたく思った

か」

ひろ子の妹が、疎開して、夷隅川のそばの障子も畳もない小屋に菰^{こもだ}垂れの姫というような暮しをしていた。ひろ子はそこで、潮の香をかぎ、鯨油ランプの光にてらされる夜、濤の音をきき、豆の花と松の若芽の伸びを見ながら、井戸ばたでよごれた皿などを洗って数日くらしした。その数日は、それまでの数年間のくらしの精髓が若松のかおりをこめた丸い露の玉に凝って、ひろ子の心情に^{したた}滴りおちるような日々であった。

「——チエホフが、おくさんのクニツペルにやった手紙およみになった？」

ひろ子は、封筒の中へ、原稿をしまいながら、重吉にきいた。

「今おぼえていないな」

「チエホフは、しゃんとした人だったのねえ、クニツペルに、芸術家としてお前自身の線を出せ、自分の線を発見しろ、とくりかえし云っているのよ。——でも、私はつくづく思ったわ。クニツペルにはおそらく特色とか個性とかいう位にしかうけとられなかったでしょうと。——ある芸術家の線なんて、全く歴史的だわ、ねえ。線としてまとまる要素なんかほんとに複雑だわ。しかし、まとまるためには微妙きわまる媒介体がいるのよ。それは、理窟じゃないわ、ただの理窟じゃないわ。実に人間らしい情理が一つになったものだわ——それでしょう？」

重吉の床のわきで羽織のほころびをつくろいながら、ひろ子はそんなことを熱心に話した。もう重吉は、つぎは俺がしてやると云わず、よみかけの書物を枕のわきに伏せながら、仰向きにねていた。

七

十日ほど重吉が引こもっていたうちに、丘と丘の間にある自立会に向つて、四方から流れよつて来ていた力が、渦になつて、そろそろと仕事の中心を、市内へ押し移しはじめた。

ある朝、出がけに、重吉はひろ子に一枚の紙きれをわたした。

「こんど事務所がそこになるんだよ、きょう、昼ごろ、弁当とどけて貰えるだろうか」

「この新しい方へ？」

「ああ」

「いいわ」

紙きれには鉛筆であつさり地図がかかれていた。元電気熔接学校というところが赤旗編輯局へんしゅうきよくと示されている。

「この地図頂いておいていいの？ あなたは大丈夫？」

「大丈夫だ。代々木の駅からすぐだよ、二本目の道を来ると、左側だ」

時間をはからって、ひろ子は弁当包みをもって代々木駅に降り

た。ごくたまに乗換のとき、しかもひろ子の記憶では、のりまちがえて間誤付きながら乗りかえるようなとき、二三度のぼりおりしただけの代々木駅の前に立って、地図のいう二本めの道をさがしたが、はつきり見当がつかなかった。やや暫く立っていて、ひろ子にはそれが二本めと思えたアスファルトのひろい道を左へ歩き出した。じきだというのに、左側にそれらしい建物もなくて、人家らしいものはなくなり、ガードと、神宮外苑の一部が見えはじめた。ひろ子は、心細くなつてリアカーを曳いた男と立ち話をしていたエプロン姿のお神さんに、電気熔接学校と云つて訊いてみた。そのガードをくぐつて左へ出ると、ロータリーと交番があつて、そこを又左へとおそわつた。その辺はすっかりやけ原で、

左手にいくらか焼けのこった町筋がある。そちらへ辿つてゆくと、右手にコンクリートの小ぶりな二階建が見えはじめた。重吉は左側だと云った。なのに、右側にあるのがそれらしい。半信半疑に近よったら、長方形の紙に、赤旗編輯局とはり出されて、両開きのガラス戸の入口がしまっていた。

赤旗編輯局。——ひろ子は、その字がよめる距離から入口のドアをあけるまで、くりかえしくりかえし、その五字を心に反覆した。これまで、日本ではただの一遍も通行人に読まれたことなかった表札であった。赤旗という新聞を知っているものも、その編輯局と印刷局が、どういうところにあるのかは知っていなかった。人々が十数年前、どこか市内の土蔵の地下室にその印刷所が

あつたことを知ったときは、スパイによつてその場所があばかれ、当時活動していた重吉たちすべてに、事実とちがう誹謗の告発がされた時であつた。ひろ子の文学上の友人で、その頃、印刷所関係の仕事をしていた詩人があつた。このひとは、十一年後の十月十日に解放された。重吉たちはもとより、とりわけその友達が、こうして大きく貼り出されている表札をよんだとき、涙は彼のさりげない笑いの裡にきらめいただろうと、思いやつた。一枚の赤旗のために、それをもつて女がつかまれば、陰毛をやかれるような拷問を受けた。それを知つていて、女は、やはり赤旗をもつて歩きもしたのであつた。

ひろ子は、これまで開けたことのなかった大きな箱のふたでも

とるように、丁寧にそつと入口のガラス戸を押して入った。入ったばかりの右手に受付のようところがあつて、つき当りは、薄暗いガラシとした広土間であつた。土間には太い柱がたっている。

ひろ子は、その辺に誰もいないので、コトリ、コトリ下駄の音をさせながら、左手の階段を二階へのぼつて行つた。元は活動小屋だつたのを、学校に直したというその建物は荒れていた。二階の壁の上塗りのははげ落ち、きずだらけで随分きたなかつた。妙な建てかたで、数の少い外窓の内側が窮屈な廊下になつていて、その中に広間があつた。階段口の右手に、狭い小室が一つある。

ひろ子は、荒れてきたない廊下のところに立つて、重吉はどこにいるかしら、と思つた。建物じゆうにまだ人はごく少ししかい

ないらしかった。永い間人気なく、しめこまれていた埃と湿気のおう広間の一隅で、その日の午後から開かれる解放運動犠牲者追悼会のために、演壇に下げる下げビラを書いている人たちが四五人働いているかぎりだった。重吉はそこには見当らなかった。すると、階下から二人づれの若い男が、足音を揃えるように登つて来て、ひろ子を一寸見て、わきを通りぬけ、右手つき当りのドアの中へ入った。そこには人がいるらしい。しかし、ひろ子は、どうしても、ずけずけ入って行つて、内部を知らない室のドアをあける気がしなかった。

ひろ子が小さかったとき、建築家であつた父が、八重洲町の古い煉瓦のビルディングの中に事務所をもっていた。その事務所を、

ひろ子はどんなに尊敬し、憧れ、好奇心を動かされたろう。ジリ
ンと入口のベルを手前にひっぱって鳴らすと、爺さんの小使いが
出て来た。そして、父のデスクのわきに案内された。事務所は、
どこもアラビア糊のような匂いがした。ひろ子は父にことわり、
その許しが出ないと、半地下室で青写真が水槽に浮いている素晴
らしいものさえ、勝手に見にはゆかなかった。

日本ではじめての日の目を見るようになった赤旗編輯局のきた
ない壁も、古くさくてごたついた間どりも、埃くささも、ひろ子
の心にとっては、昔父の事務所で感じたころもちに似た思いを
誘うのであった。ひろ子は、感動のあふれた、子供っぽい顔をし
て、廊下に立ったままでいた。

廊下のつき当りが、どこかへ曲っているらしく、そっちから不意に重吉が出て来た。ひろ子は、思わずよつて行つた。そして、

「きたないけれど——いいわ」

と云つた。重吉は笑つた。

「こつちへ来るといい」

つき当りのドアの中は、この建物全体と同じようにまだがらんとしていた。むき出しの床に、粗末な板テーブルと床几とが二列ほどに置かれていた。一方の床几に見知らない人が黒い外套の襟の上から、やせたボンノクボを見せてあちら向きにかけていた。

つき当りの板テーブルに、重吉よりはおくれて宮城から出獄した仲間の一人がいた。公判廷でみたときよりももっとやせて、一層

角のついた正八角形という顔の感じである。ひろ子は、その手を執つて挨拶した。さつきの男二人は、入れちがいに出てゆき、重吉が、

「弁当もつて来たかい」

ときいた。

「御一緒にたべたら？」

「僕はあるんです」

そのひとは、握り飯を出した。重吉とひろ子は弁当箱をあけ、いわし鰯のやいたのを三人でわけて板テーブルの上で食事をはじめた。まだ湯をわかす設備もなかった。

そして、食べているところへ、一人新聞記者が入つて来た。そ

の記者は重吉とうち合わせてあつた用向きについて事務的に話してから、煙草に火をつけ、世間話をはじめた。

「この間うちから僕は徳田さんにも会つたし、志賀さんにも会えたんですが、袴田里見さんというのは、一体どんな人です？ どううにも会えないで残念なんだが」

ひろ子は、ひどく面白がつた眼つきで重吉を見た。重吉はおかしそうに笑っていたが、一寸となりを見てから、

「すぐ近くにいますよ」

と云つた。

「え？　じゃきよう会えますね」

「ここにるのが、同志袴田です」

記者の真向いで鰯をかじっていたひとが、

「やあ」

と、笑い出した。

「どうも——これは……」

記者は、今更床几から立上るのも不自然で間誤付きながら、片脚をそろりと床几の下へかくすようにした。

「ほかの政党だと、幹部連のえばかりかたがちがうから、どこにいたって入ってさえ行けば一目でわかるんですが、どうも共産党の人は……失礼しました」

名刺を出して、頭を下げた。

格別用談もなくてその記者が去り、やがて黒外套の見知らない

人も出て行つた。二人きりになったとき、重吉が、出ていたノートを書類鞆にしまいながら、

「ひろ子、来たついでに経歴書、出してゆくか」と云つた。

「経歴書つて——」

突然な気がして、ひろ子は躊躇した。経歴書を出すということ
は、正式に組織上の手続きをするという意味であらう。

「それは、わたしとしては当然なことだけれど……」

ひろ子には、今、直ぐ、ここで、という用意がなかった。二つの仕事は両側から一時に迫つて感じられた。文学の仕事と、ひろ子が女であるということから自然おこつて来る婦人関係の仕事と。

その頃、ひろ子には、あとの方の用事が多かった。書くものも、所謂啓蒙風のものばかりの結果になっていた。

重吉は、いくらか促すように、

「——今、みんなの経歴をあつめているんだ」と云った。

「——仕事、どういう風になるのかしら。それが分らなくて」

ひろ子が短い啓蒙的なものをかくたびに、重吉は、仕事を整理しろ、と云っていた。そんなことで、いつ小説が書けるか、と云っていた。文化の各方面で、それぞれ本当の専門家が生れなければならないことは痛感されていた。昔のプロレタリア文化運動とそれにしがった人々の仕事ぶりの推移をみれば、それはすべて

の人に肯ける必要なのであった。小説はいつ書くのか、と、とがめるように云う時さえある重吉の考えは、経歴書とどういう角度で結び合わされているのだろう。拒絶する理由はどこにもなかった。それはひろ子にとって、ひろ子が石田の妻であることに等しく自然な本質に立っている。が……

「今すぐ書けなければ、あとでもいいんだ」

そこへ、又見知らない黒外套の人が戻って来た。ひろ子は、十分話し合えず、すまない、いやな心持でその話はうち切った。

八時すぎて夕飯が終ったとき、ひろ子から再びその話をとりあげた。

「きょう、もしかしたら、あれを書くようにと思っておよびになったの？」

「そういうわけでもなかった。——どうせ来たんだからと思っただけさ」

ひろ子は、洗いものはあとまわしにして、昼間自分の心に湧いた躊躇について説明した。

「仕事のことが、その点ではつきりわかれば、わたしは勿論いやというわけはないんです」

「そんなことは、ひろ子自身の仕事ぶりで、何が一番適当したところか客観的に証明してゆけばいいんだ」

「そういう風にやって行っているなら、ほんとに、うれしいわ」

「だってそれが当然だろう」

「そうだと思うわ。でもね、それが当然だと思われるときいたら、どんなにいろんな人がよろこぶかわからないと思ってよ——何となしに心配していると思うわ。場ちがいのことで、自分の専門が、分らないようになるんじゃないかと心配している人が少くないんだと思うんです……」

重吉は、自身が文学の仕事から政治の分野に移って行った時代の、非合法の激しい日々を深く思いかえす風だった。

「もとの弾圧や苦勞がひどすぎたから、今でもまだおじけづいているところもあるんだね」

「その点だけを一方的に誇張して知ったかぶりをするのが見識だ

と知っている妙な連中もあるし……治安維持法というものがなかったみたいに云う人があるわ。それがどんなことをやったから、ああなったのか考える必要もないみたいにいう人もあるわ」

しばらく黙っていて、重吉は、

「だが、いまの、一番ふさわしい仕事をしていい、ということは、作家なら作家としての日常に、歴史的な責任を求めないということとじゃあないんだよ」

ひろ子の理解を補おうとするようにつけ加えた。

「それは、わかるわ。求められるというわけのことじゃないんですもの、土台——自分が求めて、その門に到った、ということなんだもの……」

「文化関係の人は概してこだわるね」

ひろ子の場合をこめて、更にひろ子の知らない、いくつかの例を、心のうちで調べるように重吉が云った。

「——やっぱり生活や仕事のやりかたが個人的なせいかもしれないね。……夫婦なんかの場合、ギャップはうめられなくなるからね」
最後のひとことを、ひろ子は瞳を大きくしてきいた。重吉がそれを云ったということではなく、一番しまいに、ひろ子が自分で自分のここちをきめたのち、はじめて重吉はそれを云った。そのことが、ひろ子のききに銘じたのであった。

十二月はじめに、はじめての大会がもたれることになった。赤

旗編輯局という表札と同様に衆目の前でもたれる大会として、それは最初のことであつたが、歴史の中では第四回目に當つた。

いろいろの大衆的集会も活気にみちてもたれていて、一九四五
年の冬は、日本の民主主義の無邪気な発足の姿であつた。

こがらし
木枯の吹く午後おそく、ひろ子は、前後左右ぎっしり職場の

若い婦人たちで埋つた講堂で、ニュース映画を観ていた。それは「君たちは話すことが出来る」と云う題であつた。十月十日に、同志たちが解放される前後を中心として、治安維持法と、その非道な所業、その法律の撤廃を描いた映画であつた。山本宣治を殺して出来た治安維持法が、小林多喜二を虐殺し、渡辺政之輔その他たくさんの人々を犠牲とした。小林多喜二が命を失つたときの

顔が大うつしにされたとき、ひろ子は総毛だつて涙をためた。ひろ子は、この顔を自分の眼で見た。小林のおかあさんは、この息子の顔の上に身をなげふせて、優しく優しくこめかみの傷を撫でながら、どんなに泣いたろう。あんちゃん、どげにきつかったろうなあ、そう云つて撫でては泣いた。

その治安維持法によつて獄につながれている人々の、生活ぶりが、薄暗いのぞき穴をとおしてうつされた。やがて、この悪法は撤廃されることになって、画面に一つの力づよい手が現れて、特高と書いた塗札をひきむしつた。検事局思想部の掛札も、もぎとつて床にすてられた。画面にふたたび、府中刑務所のいかめしい正門が見えて来た。遂にこの扉の開かれる日が来ました、という

言葉とともに、しずかに、ひろく一杯に刑務所の大門が開いた。急にカメラの角度がかわって、ひろ子たちの方へのしかかつて来るように、その門の中からスクラムを組み、旗をかざし、解放された同志たちを先頭にした大部隊が進行して来た。真中に徳田、並んで志賀、その他ひろ子の顔も見分けられない幾人かの人たちが、笑い、挨拶の手を高くふりながらこちらに向って進行して来た。隊伍の足なみは段々精力的に高まって来て、ある角では出獄した同志たちが、肩車ではこばれる姿が見えた。或るところでは、体をうしろに反らせた駈足となり、幾本もの旗は列をとりまいてひらめき、わっしょ、わっしょという地鳴りのような声々とザッザッ、ザッザッと規則正しくふみしめる靴音は津波のように迫っ

て、やがてその^{えんえん}蜒々たる列伍は、歴史的な時間の彼方に次第次第と遠のいて行つた。幾千人もの鼓動とともにほき出される、そのわっしょ、わっしょという力のこもった声と、ザッザッ、ザッザッという地ひびきとは、ひろ子を泣かせて、涙を抑えかねた。まわりでもこのとき泣いている人がどっさりあつた。涙で頬をぬらしながら、なお、その身内をせき上げるような熱い轟きを追つて画面に見入っているひろ子の心の視野に、丁度その隊伍の消え去ろうとするかなたから、二重映しになつて一人の和服姿の男が、風呂敷包みを下げ、草履ばきでこちらに向つて歩いて来るのが見えるような気がした。こちらに向つて歩いて来る人物はぼつとりとたった一人である。しかし、その透明な体の影をつらぬいて、

なおわっしょ、わっしょという、ときの声が響いており、ザッザッ、ザッザッという地ひびきはとどろいている。透明な影のように画面から歩み出し、しかし、くつきりと着ている紺緋までも見える人物は、出獄したばかりのイガグリで、笑っていてそれは重吉であつた。重吉は一人で歩いている。「君たちは話すことが出来る」と、今は工場の広庭でかたまつて話している人々の間を、重吉は歩いて来る。「君たちは話すことが出来る」円く集つて話している女のひとたちのよこを、重吉は歩いて来る。ひろ子は、見ている画面が益々幾重にもなつて、きのう見て来た代々木の事務所の入口に、かかげられていた横看板の字が、そこに浮んで来るように思えた。すこしくずした太い字で、日本共産党とかかれ

ている。それは、いかにも大きい板をこしらえたどこかの土木業の誰かが勢こんで筆をふるったという風な文字で、肉太で、べろべろして、ちつとも立派ではなかった。しかし、その大看板が車よせの庇の上で、うららかな冬日を満面にうけているところは、粗野だが真情のある大きな髭男がよろこび笑っているような印象を与えた。通りから見あげて、ひとりでに口元がくずれ、昔の女が笑いをこらすときしたようにひろ子は、元禄袖のたもとで口をおさえた。その玄関の中では、きのう、もう多勢の人たちが働いていた。重吉たちのように、のびかかったおもしろい髪で働いている人が少くなかった。まるで短かった重吉のイガグリは、ひろ子がさわると、ごく若い栗のいがのような弾力と柔かさで掌にこ

たえるように伸びて来ていた。そういう髪の人々が、いそがしそ
うにその建物を出たり入ったりしながら、第四回の、大会の準備
をすすめていた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第六卷」新日本出版社

1979（昭和54）年1月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十卷」河出書房

1952（昭和27）年6月発行

初出：「文芸春秋」

1946（昭和21）年9～11月号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年6月25日作成

2007年7月239日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風知草

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>